國朝叢談 塩原多助一代記 三

k939
S67
v.67-3
133947

K939
S67
ユ67-3

盧原多助一代記第十三編

三遊亭圓朝演述
若林玵蔵　筆記
酒井昇造　助筆

第十三回

小平奸計奪證書
多助慧眼破騙術

盧原多助ハ計ちも山口屋善右衛門ヨ助けられ。此家ヨ奉公を致して居りましたが多助の行狀の實明なのヨ主人ハ素より奉公人一同が感心致ました。其多助の氣の利くとハ主人の用向ばかりでなく。番頭から小僧から家へ出入る者一同からおさんとんヨまでも能く勤めまもが。決して蔑視てするのでハなく。眞實ヨ致しますので番頭が肩が張つた と云へば直ぐヨ後へ廻つて打きます。エヘンと咳拂ひをすれば直ぐヨ灰吹を持て往く。風を引たと云ふと直ぐヨお醫者を呼んで來る少し病

氣が重いと思ふと。直ぐよ早桶を買て來る。まさかそんな事もありまも
まいけれとも多助ハ少しも障がありませんで稼ぎまものハ。追々金を
貯めて國へ歸り。養家へ恩返しをしやうと云ふので。後よハ地面の廿四
ケ所も持やうなりますが。さうありまもよハ後楯と云ふものがなけ
ればなりません。商人が大きくなるよハ資本を貸して呉れる金主と云
ふものがなければ大商人よはなれません。もので御座いまもが。茲よ下
野國安蘇郡飛駒村よ吉田八右衛門と云ふ人が後よ多助の荷主よ相成
ますが。此人が三十五歳よなるまで江戸へ出た事がありませんのは。此の
人の親父八左衛門ハ六十以上の年で御座いまもが總て江戸の取引先
の事を致して居りますから。八右衛門ハ江戸へ出て參りませんでした
が親八左衛門が不圖と病氣付きましたよ因て。八右衛門が始めて江戸へ
出て參りました頃ハ寶暦十二年十二月の十五日深川八幡の年の市で
其頃ハ繁昌致しましたもので。餘り込み合ふから八右衛門ハ田舍漢の

事でもから恐れまして。高橋を渡つて深川元町へ出て。猿子橋の傍よ濱
田と云ふ料理屋がありまも。其夜ハ雪がチラ〳〵降出し眞闇でもから
外よあまり多人數の合客ハありません樣子でありまもゆゑ。濱田へ上
つて見まもと衝立を建て彼方よも此方よもお客が居ります。八右衛門
が御膳を喫べて居りますと。足利よ猿田と云ふ所があつて其處よ早川
藤助と云ふ出船宿があります。丁度其主人が居合せまして。思ひ掛けな
いから八右衛門の側へやつて參りまして藤「誠よ暫くで御座いました。
八右衛門樣ドやア御座へませんかへ八「誠よこれハどうも久しぶりで
逢ひました。藤助どんでがんもか。尋ねべいと思つたがッイ無沙汰しま
したハア八「能くお出よなりました。何の御用で八「ハア私もとうか江戸
と云ふ所へ來てへと思つて居たが。親父が達者で江戸の取引ハ已がす
るから汝ハ家よ居ろと云ふから家よ
ありやせんが親父が塩梅が惡りいの
で。手前往つて仕切を取つて來う

と云ふので。仕切を取りよ來ましたヨ。何んよ取引先きの神田佐久間町の善右衛門が一番大へから彼方へ往つて一夜や二夜の泊つて來ても いゝからと云ふが。親父が盥梅が惡いからハア早く歸るべいと思つてハア藤「ハイ山口屋善右衛門の大くつて荷主を大事よするのの彼の位な家の無い。彼の親父も中々荷主を大事よもるが。悴の善太郎と云て年の若いが能く客を大事よもる。第一彼處の家の饗應が違つてハア八「さうだつて親父よ聞て居やしたが私の顔を知らないから向ふで金を渡さねいといけないが。そんな事のあるめいかねェー藤「ナアよそんな事のねへ。貴所の始めての事だから親父様が往くより却つて大事よもるだんべいヨ八「親父も汝の始めて往くのだからこれを持て往くがいゝと云ふので。受取證文を親父が寐床で書て。手紙と此八十兩の受取證文を持て來やんしたから多分渡もべいと思て居りやも藤「そりやア大丈夫渡しやもこハから佐久間町へ往くよの大橋を渡つて濱町へ出れべようがんも。私の花川戸の炭問屋へ些とべい預けたものがあつて寄らなければならねへから大橋まで一所よ參りませうと。昔の田舍の衆の大聲で話しを致したもので御座いまも。是から勘定を濟せ。兩人連立て此處を出て。大橋の袂で別れまして。早川藤助のお船藏の方へ參り八右衛門の大橋を渡つて彼是廿間ばかり參りますと。パラ〳〵〳〵と駈けて來たものがありましたが。其頃の商人の皆雪駄を穿て居りまして。土鰌の鼻緒の下りの雪駄で駈けて來まして。前へのめるとたんよ八右衛門の肋骨へ彼の男が頭を打付けましたから。八右衛門の驚いたのなんのと申まして其男も喫驚きまして男「何んとも申譯がありませんが。少し怪しい奴が跡から追駈けて參りまして少々貯へもありまもから大橋の央バまで遁げて參りますと。貴所のお姿が見へまもから追付ふと思つて驅けて參りまもと。貴所よ突當りまして誠よ申譯がありません。御免なすつて下さい。何

處かへ當たりましたかな。確りなさい〳〵八「アヽヽヽアー痛い。貴所はゝァ怪我と云へば仕方がねいが人の横腹へ石を打つ附けたかなァ男「石ドやありません。轉ぶ柏子よッイ頭が當りましたので八「ひとい石ヽが身體が痹れて立てねい男「誠よ頭だつたなァ嗚呼、痛いそんならいヽ申譯がありません。此處ヽ往來でお話しが出來ませんが何處か茶屋へでも參りませう。此處よ持合せた藥もありますから八「アヽ痛い立てねい男「そんなら私が脊負て上げませうと。彼の男も怪我とヽ云ひながら氣の毒よ思ひまして脊負やうよして橋の袂の茶屋へ連れて往きました女「人つしやい〳〵〳〵男「とうか姉さん少し加減の惡方がお出よなつたから奥を貸してお呉れ女「へェ貴所お加減がお惡いのでもか。嘸御困りで御座いませう。お草鞋で御坐いますか足を拭て上げませう抔と。申しませと。彼の店風の人が八右衞門の手を取て座敷へ上げまして男「誠よ申譯がありません八お前さんかいと。見ませと。木綿物でヽ御座いませが新清した着物よ。小倉の帶を締め。細かい縞の前掛を掛けて居りまして。色の淺黑い店風の人でも八「誠よ貴所ヽどういふ事で盜賊よ逢ひましたか男「私ヽ横山町三丁目の播磨屋と云ふ袋物屋で御座います。深川までお拂を取りよ參りまして。百金受取て歸りましたから成るたけ賑やかな所を通つて來ますといやな風体な奴が跡から附て來ましたから盜賊だと思ひましたゆゑ。逃げ出もとたんよ貴所よ打つかりまして何とも申譯がありません。之れよ有合せました藥を湯で溶きましたから召上つて下さい八「これヽ誠よ有り難う。怪我とあれば仕方がねいが。金を持て夜歩行ねいがいゝヨ。私やァ田舍漢で始めて江戸へ出て來たんで。ァよ醫者にも及ぶめいが。横つ腹が突張つて仕樣がねい女「貴所些とお横よおありなさい男「姉さん此近所よお醫者樣ヽありませんかね女「誠よとうも此近所よいお醫者樣ヽ御座いません。濱町まで參らなければ御座いません男「そうかい枕を貸してと。八右衞門を寢かしまし

て彼の男が側で擦て居りまもうちゐ。八右衛門は宜心持よなりました
から。スヤ〳〵と寢まして暫く經て目が覺めて見ますと。彼の男ハ居り
ませんゆゑ。起上つて手水ヨ往うと思ふと立てません。それヨ舌がつり
上つて口もきかれません八「ハテナ身体がもびれせ歩行ねへ。起事が出
來ねい。ホリヤ困まつさな女中衆〳〵と。少しも舌が廻りません女「どう
かなさいましたか八「今茲ヨ居た人ハ如何すさな女「彼の方ハお醫者様
を探して來るから少し貴所を寢かしておいて呉れと仰しやつてお出
よなりました八「ハセナ。已ア此處へおいさ包ざの脇差ざのハざうしさ
な女「あの包や何かを此處へ置いてハいけないからと云つて。お連れの
方がお脚半までお持ちなすつて御出かけよなりました八「ソラア「盗賊
ざア女「大ほきな聲を成すつちやアいけませんヨ八「盗賊だア。盗賊野郎
〳〵。早く駕籠を呼ひよやつて呉れと。八右衛門ハ騒いで居ります。
又山口屋善右衛門の宅でハそんな事ハ少しも知りません。其頃お商人

方でハ夜の四ツ時よなれば戸を締めて仕舞ひます。店ヨ子僧が手習を
して居ります此方ヨハ番頭が帳合を致して居りますと。土間ヨ筵を敷
いて頻りヨ草履を拵へて居りますものハ多助で御座います男「へイ御面
下さい〳〵〳〵小「誰様ですナー男「少し御面下さいと。云ふから小僧が
戸を明けると。はいつて來た男は。半合羽に千草の股引ヨ草鞋がけで一
本お太刀を差して。手ヨハ小包を提げたまゝ男「ハイ御面なさい小「何方
様からお出で御座います男「エ〳〵私ハ下野國安蘇郡飛駒村の炭荷主八
右衛門と申すもので御座いますも番「ハイ〳〵此方へ〳〵八「毎度親父ば
かり出て居りまして私しが此方へ參りましたのハ初めてゞ御座いま
すが親父が病氣で寢て居りやして。寢床で證文と手紙を書て私が代ヨ
來ましたが此方では誰様もお變りハありませんか番「エヽお噂ヨハ承
わつて居りますが能くとうも貴所がお出向で御座いまス。毎度主人と
貴所のお噂でかり致して居りました。マアお上んなさい八「上つては居

小平騙術を逞らせんとして多助が看破せらる

梅蹊楊國峯

道連小平

番頭和平

塩原多助

られません。平常あち宜が親父が煩らつて居りますもから。直ぐよ扇橋まで往つて船へ乗つて歸る積りで御座へますもから。どうかそれへ證文を持て參りましたから八十金お渡しを願ひますも。慥よ三貫目炭を贈つたから夫丈の代を戴いて。船賃ハ跡で宜御座いますから八十金ハどうか只今願ひますも番「ヘイ〳〵と云ひながら手紙を讀上げて見ますと。金を八十兩悴よ渡して呉れろとあり。受取證文を見ると八右衛門の書たのよ違ひないから安心して番「若旦那様〳〵。兼々お噂の八右衛門様がお出でよなりました。エヽこれハ私共の若主人で。今晩ハ主人が居りませんから代を致しますので八「ハア之れハどうも兼て親父から承つて居りましたが好若旦那で貴所が善太郎様で御座いますか。番頭どんハ和平さんと仰いますかへ。エどうか此後とかお心安く願ひます。それでハとうか金子の處をお渡しを願ひますも番「それでハ毎でも砂糖と擂引をお歳暮よ上るんでもが。貴所お持下さいますか若し御迷惑なら小僧よ持たして上ても宜しう御座いますか。何よしろ是非御一泊を願ひたうお御座いますもが。親父様が御病氣の事でハ據ろ御座いませんでへエ八「へエ結構で御座いますも。田舍でハ擂引抔ハ結構で御座いますから扇橋まで持つて參りませう番「それでハ八十金差上て。一貫二百文のお船賃ハ跡よ致しましてと。云ひながら金の勘定をして居りまして。今渡さうともると多「番頭さん〳〵。金を渡もそのハ容易よ渡さねへ方がいヽ。顔を知てる人じやァねいし初めて來た人だから旦那が歸つて來て話しをしてから渡した方がようがんも番「餘計な事を云てる。お前の知てる事じやァねいヨ多「後ろの方から口を出してハもみませんが。貴所ハ飛駒村の八右衛門さんよ違へありませんかへ八「ハイ私はそれよ相違ねへが。深くお問糺しをなさるのは私を疑ぐんなさるのかへ多「それでも私ァ斯うやつて暗へ所で辭を掛けちやァ濟ねへが。貴所ハ本統よ吉田八右衛門様よ違へねへりナ八「本統の虚のと云ふのハ私を疑ぐるのかエ。玆

る親父の手紙も持て來たのが確かな證據だのよ何をお疑ぐりなさいまもナ多「本統なら私が少し承りてい事がありやも番「コレ〳〵何を云ふ。エ、これハ山出しで何も解りませんからどうかお腹をお立ちなさらないで多「マア番頭さん默止てお出なせへ。私聞かねいければならねい事があるが。モシ八右衛門樣とやら貴所ハ下野辭でねへから私が聞くだがどうも貴所ハ下野の者じやアがんもめい八「私ハ下野の飛駒村の者よ相違ねいがお前ハ何を云ふのだ多「ナアよお前さんの辭ハ下野も上州も武州も方々の辭が交つて居るやうでがんす番「お前何を云ふのだ默止て居ろ〳〵〳〵多「それじやア番頭さん。私が暗い所で何にか云て居ても分らねへから其處へ出やんしやうコレ八右衛門さん。アはゝゝゝとうもハア騙す事ハ出來ねへもんだ。久しぶりで逢たが。お前己を忘れたかい。お前ハ道連の小平と云ふ草賊だつけなア小「イヨウと。小平ハ喫驚致し流石の惡人も跡へ下りました多「嘘ハ吐けねへものだなア。小平ハア斯知れてしまつたから己れは草賊だと云て歸つた方が宜かんべい。番頭さん此奴ハ道連の小平と云ふ草賊でがんもヨ番「イエー草賊かい。それだから夜ハ戸を明けねい方が宜、と云ふのだ。大變な騒ぎが出來た多「アハゝゝゝ既よ八十兩と云ふ大金を奪れる所だつた。去年汝が己れよ刀物突付て既の事で殺される所を助かつて此處よ居るさが。汝ハまアだ惡事が止まねへのか小「妙な所で逢つたなア。而して貴樣ハとう云ふ譯で此處の家よ居るのだ多「どうして居るつて。己ア金を貯めて國へ歸るべいと思つて此所な家で稼いで居る所へ汝が來たから分つたのよ小「エゝチイ番頭さん私ア道連の小平と云ふ草賊で。實ハ少し譯があつて此の書付が手よ入たから八十兩充分と騙り取ちうと思つた所が。山出しの多助の野郎よ見あらハされ。化の皮が顯れてしまつたから此儘じやア歸れねい。サア此の大きな家臺骨から突き出されゝ、べ本望だ。サア突出して貰はう番「突き出すつて。どうもこりやア困つた

と。番頭ハ頻りヨ心配致して居ります所へ。此頃ハ當今とハ違ひまして人力が御座ませんから駕籠で大急ぎに參りましてトン〳〵〳〵「鳥渡此處をお明け成もつて下さいと。今度ハ眞實の吉田八右衛門と云ふ人が涎をダラ〳〵滴らし入つて參り。只見れバ先程の奴が自分の身形りで居りまもから。八右衛門ハ突然此野郎と云ひながら一生懸命ヨ這ひ上がつて小平の胸ぐちを掴んで放しません八「此野郎呆れた野郎だ。己が身體ヲ利かねへやうヨして己れが荷物から脇差から大事な書付まで盗みやがつた。盗賊〳〵此野郎〳〵小「靜かしヨろヱと。云ひながら八右衛門の手を逆さヨ捻つて其處ヨ投げ付け。草鞋穿はきの儘でドッサリと店先へ上り胡座をかきまして小「ヤイ百姓。實は己ア小平と云ふ草賊だ。上州で人殺から足がつき居られねへから其塲をふけ。猿田船へ乘て江戸へ着き。先き濱田で飯を食ひながら聞いて居ると。手前が此の山口屋善右衛門へ八十兩の爲換を取りヨ來たと云ふ事を聞ちやア遁さねヱ。地獄耳。汝の跡を付て來て轉んだ振りで荒稼ぎ。頭突きと云つて横腹を頭で打つて息の音とめ。御氣の毒だと介抱して呑ませた藥ハ床瘴藥だ。手前の身躰がきかねヱうちヨ。衣類から懐中物まで引さらつて遁るのを。盗人中間で頭突と云ふのだ。あの時攫つた書付から。まんまと首尾よく八十兩。い〳〵正月をしやうと思つた所が。打て違つて山出しの多助の野郎ヨ見顯はされたからもう。破れかぶれだ。サア突き出せ〳〵と云ふので店の者は大きヨ驚き頭を呼びヨやるやち。何ヨやち騒ぎ致しまもけれとも小平は鐵挺でも動きませんので。持て餘まーて居る所へ。歸つて來たのハ主人善右衛門で。これより小平を奥へ連れて參り意見を致しまもお話しは次回までお預りヨ致しませう

盧原多助一代記第十三編　終

盧原多助一代記第十四編

三遊亭圓朝演述
若林玵藏　筆記
酒井昇造　助筆

第十四回

乞レ資結レ約在レ爲二自家之計一
捐レ金修レ路將レ謀二公衆之便一

山口屋善右衛門の宅でハ道連れと綽號をされました草賊小平が强談に參りましたが。只今では强談杜騙をする者も惡才に長て居りまして。種々巧者よありましたが。其頃は强談をする者が商人の店先へ參りッサア打き殺せと云て。ドッサリ座り込みますと。表へ黑山のやうよ人が立ちまして。外聞が惡いから。餘義なく十か廿の金を持たして歸へしたものですが。只今ではさういふ事は出來ません。直ぐに巡査が參りまして。ハアコリャア分署へ參れ。おんど申ますから中々出來ませんが。昔は大

家程かういふ事をされると困つたもので。山口屋善右衛門は宅へ歸つて見ると。此騒ぎですから直くよ醫者を呼びにやりまして八右衛門を療治して貰ひ。表から此樣な所を覗き込まれてはあらんからと云ふので奥へ通さうと申ても小平はどうしても動きませんでしたが。小平も段々考へて見るに此所で云ふ事を聞かなければ爲めに惡いと思ひまして。奥の六疊の座敷へ通りました。すると主人善右衛門を始め多助も番頭も參りまして善「コレハ小平さんとか始めてお目よ掛りましたが。私も今歸つたばかりで委しい事ハ知りませんがお前さんハ私共の大事な荷主よ毒藥を服ませ身体を利かなくして。證文を持て騙りとしやうと思つて店へ來た所が宅の奉公人の多助がお前を知て居て化の皮が顯れたから突出して呉れろと云ふさうだが。惡黨の方にはどういふ法があるか知らないが。宅でハ縄付を出そ事は好まない。多助が見顯はしたのは腹も立だらうが。そんな事を云ても仕樣がないから。私が得心の上で廿両上げやう。騙つたと云へばお前の罪も重く成り。私も心持が惡いから。此廿兩を持て歸つて呉れ。殊よ暮ではあるしするからこれで辛抱してれ呉んなさい小「ヘイ有り難う御座いやす。コレハお初うにお目に掛りました。私ア小平と云ふ草賊で御座いやす。先刻番頭さんに云ふ通り。八右衛門と云ふ荷主が山口屋へ爲換を取りよ往くと云ふから少しでもさう云ふ事を聞いちやア打捨ちやア置けねいから。暴つぱい仕事だが頭で突いて毒を服ませ。生突を遣つて此方の店へ來た所が。山出しの多助の畜生よ見顯はされた上からハ。私ア縄よかゝつて出るのは承知サ。私がドジと組んだつて外とは違ひ。山口屋善右衛門さんと云ふ立派な家だから。廿ヤ三十の目腐れ金を貰つて歸つたと云つちやア盗人仲間へ恥辱だ。サアどうか突出しーて下せい。私が突出されゝばお前さんには遺恨はねいが多助。手前を抱いて往いて臭い飯を喰わせるからさう思へ多「何所へ抱いて往くんだ小「わからねェ奴だ。牢へ連れて往

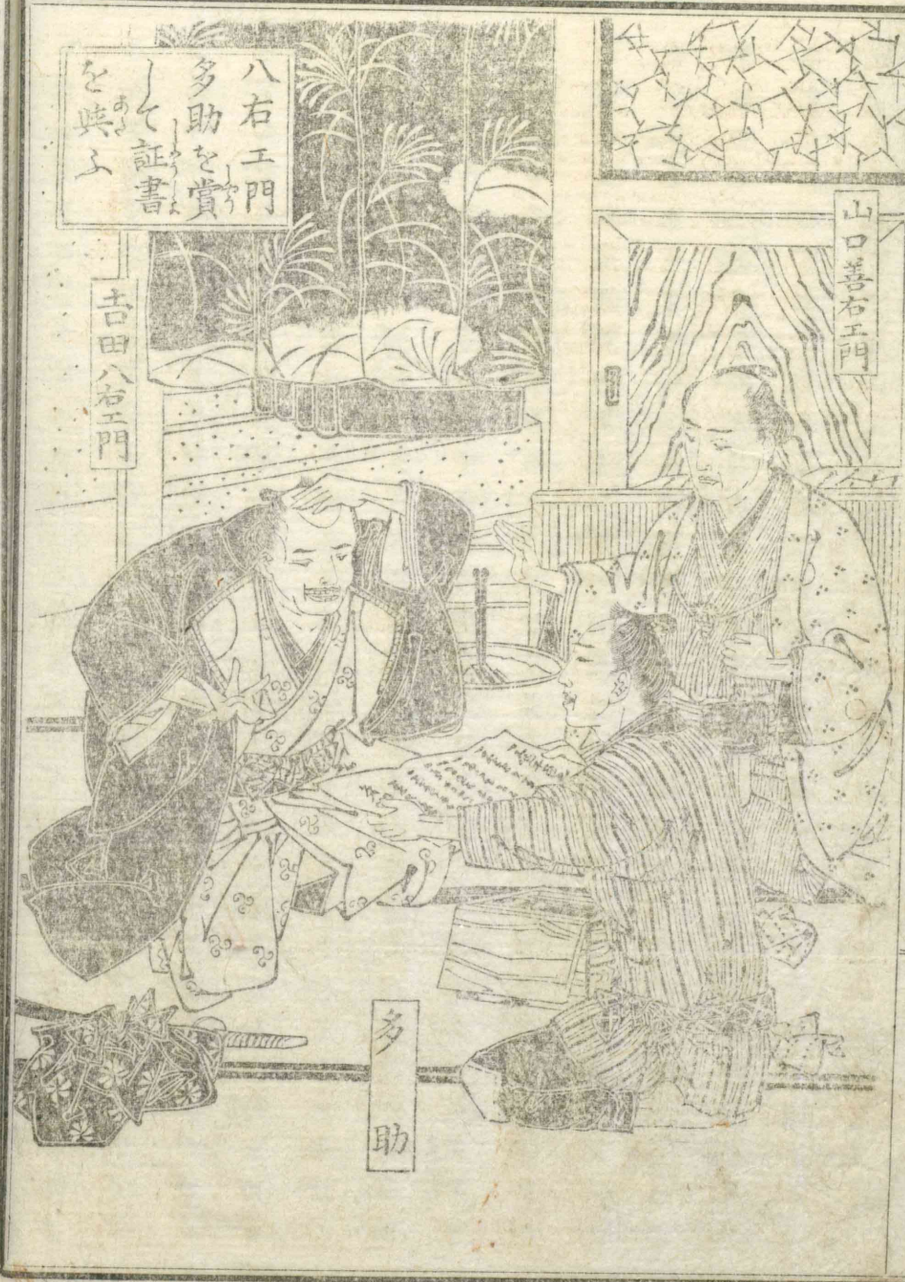
くんだ多「フウン牢へ往くのを抱いて往くと云ふのか。手前これで默つて歸れバ旦那が金を下さるから默つて歸つた方がよかんべいぜ小「默つて居ろ。此の財槌野郎め引込んで居やァがれ善「マァ〳〵これは山出しで何も知らない者だからそんなよ腹を立たないで歸へつてゐれナ小「インヤ歸らねいッたら歸られねいや。どうせ細つた素首だから三尺高い所へ板付よなつて。小塚原か鈴ヶ森へ肆された時に。ア、好氣味だと云て笑つて下せい。其代りよ多助を抱いて往かゐくつちやァ腹が醫ねへのだ多「コレ小平それじやァ是ほど旦那様が事を分けて云もて手前は肯かねいのか小「屎でも喰へ多「旦那様誠に相濟みません。貴所に迷惑を掛ますめへと。思てるにどう云ても聞かねへ。オイ小平旦那がお慈悲で二十兩と云ふ金を呉れべいと云ふに。それへ聞かねへと云はゞ仕様がねへが。コレ小平汝は情けねい人だなァ。私から事を起して旦那様に御迷惑を掛けては濟まねへ。汝と突出して此家よ難儀の掛るのを見てハ居られねへから。己は悪い事をした覺へはねへが連れて往くなら勝手よーろ。汝の先へ立て繩よかゝるべい。殺すなら殺せだが。汝殺許氣を揉んで己を殺すべいとしても。人間と云ふものは命の盡きねへ中は死ぬ氣遣ひのねへものだ。壽命が盡きたらいくら助かりてへと思つてもだめだ。ハァどんな火の中水の中でも定命の有るうちは死なねへもんだから。殺すなら殺すともどうとも勝手したがいゝだが。マァ能く考へて見ろ。實よ悪黨と云ふものは人の慈悲も辨へねへと見てそんな横倒ーなァ事を云て。此宅で斯う云ば那ァ云て困らせる。己ァ汝を悪よねへが。其根心が如何よも不良だあから一と通りの事を云ふだ汝ェ此處へ八十兩べいの金を强談よ來る爲め大事の荷主様よ毒を服まーてョ。世界の人の身体を不隨なる樣よして。さうして汝ェ種々なる物を竊み。脇差い差し。風呂敷脊負て。脚半と掛け。草鞋穿きよ成て。此處へ來て田舍漢の假聲を遣て取た所が只た八十兩べいの金。それに引替へ己ァ旦

那樣抔は座蒲團の上ゑ坐つて煙管を啣へ。ハテナァと一つ首を捻り考へると。直ゑ五萬や八萬の金を儲ける事を御存じでいらッしやる。旦那樣に比べれば汝が稼ぎは誠ゑ少せへ事で。此處ゑ臺所の流しの下より未だ小せへ。旦那樣が惡い奴に二十兩の金を呉れべいと云ふ心は大したものだ。また汝が取り損あつた金は只た八十兩。何とマァ餘り小せへ稼ぎで氣の毒だヨ。己ァ此處ゑ宅に奉公に來て。今では斯うやつて草鞋を造り。草履を直し。大騒い遣て小せへ事として居るが。今に己れが大かくなれば五萬や十萬の身代にあるべいと思つて御奉公して居るに。汝ェ壯年して。稼ぎ盛りで有りながら。只た八拾兩べいの金を取り。牢ゑ入て命を落すかと思へば。如何ゑも氣の毒で其心が虫よりも小せへから己ァ愍然でゑんねへから意見を云ふだ。エーカ。そんゑよ急いで獄門ゑありたがらねへで。旦那樣が貳拾兩下されば幸へだァから頭でも剃落かして。出家ゑなるか。又は堅氣ゑなり。誠の商ひでもするゑれば。今までーた惡事も自然ゑ消へ。疊の上で死ぬるやうになるが。どうだ此處で一つ二十兩の金貰ひ。改心して眞の人間にゑらねへか。汝ェゑ袋ゝ又旅のれ角と云て。五十の坂を越して居ゑがら。汝と一處ゑ己ァ家へ强談に來たり。れ榮を攫つたりして。己れ能く知てる。汝れ袋は惡黨だが親父いはどうだか知んねへが。大方女房のれ角は惡黨で。又汝樣ゑ子が出來たから離縁をせねへばゑんねへと云ふ所で。惡黨は惡黨連れだかられ角が汝ェ連れて出たかも知れねへが。其時は親父が善人ゑらば別れた跡の心持はどうだへ。アヽ彼奴が眞人間ゑらば己れ心配はねへものを。惡黨の子が出來たから仕方ゑく追ひ出ーたが。どうか堅氣にゑつてくれろ。惡い心を廢め眞人間ゑ成れば宜い。今一度逢ひていもんだと。親父が壯健で居れば汝が事は片時も心に忘れる氣遣ひのねへもんだから。親父ゑ對しても誠に己ァ氣の毒に思ふだ。己ァ汝と惡むじやねへ。愍然だと思ふから惡事を止めろや。コレ堅氣に成れや。大騒ぎ遣て首を投げ出

して。貪つた所が高が八拾兩計の小さな金。旦那樣の樣に一時に二萬も
三萬も儲ける事を御存じの人に比れば。あんまり小せへ考へだァから
止めろや。やァと。眞實心から說き諭され。惡人あがら小平は肝に感じま
したが。黙然として腕を組み俯いて何か考へて居ましたが。暫くして首
を擡げ。多助の顏を熟々見まして小「ヤィ多助。此野郎は妙な事を云ふ。此
畜生。申ー旦那へ。成程只今山出しの多助が云ふ通り。斯う遣て草鞋穿に
あり。田舍漢の假色を遣ひ大勢を騷がし。首尾よく往た所が唯た八拾兩。
成程是れは小せい。それに引換へ旦那抔は坐蒲團の上で喞へ煙管をし
あがら。一つ首を捻れば五千も八千も儲かると云ふ。其人に比れで虫よ
り小せいと云へば。成程小せい。夫に此野郎の云ふ通り。お袋は私の餓鬼
の時分離緣になり。私を連れて出て往く時。親父は腕を組んで。ポロリポ
ロリ泣きあがら。已の悴に斯樣な惡徒が出來るとは何たる困果だらう。
此餓鬼が眞人間あらばと。云ひながら下を俯いて居たが。今まで斯樣な

事は誰にも云はなかつたが。此野郎は妙な事を知てる。些と異ッて居ら
ァ此畜生。多「何が異つてる。已ァ方で異つてるじやねへ。汝ェ方の根性が
異つてるもんだァから當然の正直な事を云ても汝がには違てゐる樣
な聞へるのだ。已ァ眞直の事を云ふだョ。小「可笑い畜生だ。種々な事を云
やァがる。申ー旦那へ。私やァ二十兩は入やせん。此奴の前へ對しても金
子と貰つチャァきまりが惡くつて歸られやせん。旦那へ私は何んだか
變な心持ょ成て。強い事も云へなくなつた。多「駄目だなァ。早々と歸へれ
だが。折角金へ呉れべいと仰やるこんだから戴いて往くが宜い。小「ナニ
金子は入らねへが。旦那へどうか裏口から密と出して下せへと。小平は
悄然果てゝ。衣類から脇差まで殘らず置きこそ〳〵と裏口から出て往
きました。跡では皆々ホット息を吐き安心致し。尙ほ荷主八右衛門に手
當を致ますと。二日程經ちまする中に大きに口もきける樣に成りまし
た番頭「マァ御芽出度御座いました八「どうもハァ。何とも始めて參り。斯

云ふ御厄介にあらうとは心得やせん事で。併しお蔭さまで命よは別條ねへで大きよ有り難うがんした。國の方へは仔細を書いて。二三日後れて歸ると書面を出しやんしたから安心もしべいが。此方で危ねへ事金を取られやうとしたが。多助どんとやらの意見で。盗人も驚げ悄然果てゝ歸へつたは。優へ奉公人だねへ。私驚げやした。年未だ若いがねへ主人「誠よ妙な奴で。時々變な事を申ます八「兎も角も多助どんとれ呼あすつて下せへ。私も御目よ掛て置ていから主「多助や〳〵一寸來な多「へイ。あんでがんす八「ヤア。多助どん。れ前實に感心な人だ。盗人よ意見をするのを私傍で聞て居したが。れ前が此盗人の馬鹿野郎と云ふから手向ひでもするかと心配して居ると。盗人が首傾げて變な事と云ふ奴だァと云て驚げて歸たが誠よ妙な人だ。な前のれ蔭で八十兩の金子取られねへで。誠よ有り難いと。云ひながら金子を紙に包み八「たんとではねへが。どうか此二十兩取て置て呉れ。私江戸見物些と長くすれば小遣よあつて仕舞ふのだが。餘り優へ奉公人で。襤褸と被て炭い據いでる人には珍らしいから。どうか之を取て置てお呉んなせへ多「宜敷御座いやす。いりやしねへ八「少しばかりだが。年季が明けて國へ歸る時の足よもあらうから取て置て呉れ主「有り難い事で。大金だが折角の思召だから戴いて置くがよからう多「有り難うがんすが私金戴きますめへ八「そんな事を云はずよ取てれけ多「何も貴所に仕た事じやねへから私戴きやせん。此處お家の旦那樣には命助けられ大恩を受けた御主人樣と。大切に奉公ーて居りやす所へ間違が出來やしたゆゑ。家の事を家の奉公人がするのは當然でがんすから。どうも二十兩といふ金を請取る譯はがんーねへから貰われやしねへ。駄目で御座りやす主「折角仰やる事だから戴いて置きなョ多「八右衛門樣。貴所私よ禮をーていと云ふが。主人へ義理に斯う遣てれ出しなんすか。又眞實心から私に呉れべいとするかへ八「誠よ困りやすが。何よもサ。見へも糸瓜もない。唯れ前の心持が如何にも感心


八右エ門多助を賞して証書を與ふ
吉田八右エ門
山口善右エ門
多助

道連小平
梅堅
國芳

だから出すのだから。マア眞實の心から上げるのだ多「そんなちどうか金で呉れねへで。れ願が有りますが叶へて下せへやせうか八「私に出來る事なら叶へて遣りやせう多「そんじやァいけねへ。慥ゑ叶へて遣る。何んでも聞くと。返答をぶちあさい主「そんな事を云ふ奴があるものか。併し八右衛門さん此奴の事でそから差ーたる事でも有ますまいからどうぞ願を叶へて遣て下さいましナ八「ようがんす。何んでも叶へて遣りませう多「ア、有り難へ。此家へ奉公ーて外に何にも覺へた事はねへが。ゆく〳〵十年も經ち。年季が明けて炭屋の店でも開く樣な事が有たらバ其時貴所方から千兩の荷を送てれくんなせい八「エヽ千兩へ。魂消たねへ多「魂消ねへでも宜い。唯貰うんじやがんせんが。貴所の方から千兩だけの荷と。マア先へ送て呉れゝば。私その荷を賣りこなーて。貴所の方へ金入れるだ。金入れゝば又荷送て呉れる譯にするだから。貴所も仲間と得意先が一軒殖へ。私も利益を見るだァからお互ひに得の有る事だから。屹度送つて下せへ八「よー其時は屹度千兩の荷を送てやらう多「それじやァ。若し荷送る事が間違つたら。千兩の金を只遣らうと云ふ書面を一本下せへ八「コレハ面白い。書て呉れべいと。直くゑ硯箱を取寄せ。すら〳〵と認め。店出ーの折には必ず千兩の荷を送らうと云ふ證文を書き。印形を捺ーて多助に渡す。多助は大きゑ悦び。主人善右衛門ゑ預け置きまーて。八右衛門も國元へ歸りました。是れから多助は主人大事とそ公を致ーて居まーたが。山口屋善衛門方は毎度申上まする通り名に負ふ大家の事で御座いますから。れ大名樣方にもれ出入が澤山御座いまーて夫れが爲めに奉公人も多人數召使ひ。又出方車力あども多分に河岸へ參りますゆゑ。臺所ゑは始終膳が二十人前位は出し放ーゑなつて居り。出入のものが來ては食事を致ーます。多助ハ此家に足掛け四年の間奉公ーて居り。寶暦十三年の六月改元あつて。明和元年と相成り。其年も暮れ。翌年明和二年十一月廿六日の事で御座ます。多助は毎日〳〵

炭を車に積み。青山信濃殿町の青山因幡守様のお邸へ往きまするよ四谷へ來て。押原横町よ車を待せ置き。那所から信濃殿町まで車力が炭を擔いて參ります。此處に信濃守様のお邸がありまーたから此邊を信濃殿町と申ますので。多助は此日大きに草臥れまーたゆゑ。チト遲く暮れかゝつた時分よ歸つて參り多「〜イ只今歸りまーた主「大分遲かつたのう多「大きに遲くありやんした主「何處へか寄り道でもして居たか多「モシ旦那様お願ひが御座います。私媒、掃の時に頂戴ーた御祝儀や。荷主様や出方のものから心附けを貰ひ貯めて。皆れ預けに成て居りやんすが。彼の金子よれ足しあすつて。私よどうぞ二十両貸して下せへ主「アイ廿両それは貸しも仕様が。何にするのだ多「少ー譯がありやして買物がありやんすから。どうか貸ーて下せへ主「買物があると云つて。二十両と云へばれ前の身に取ては些と多すぎるやうだが。一体何にするのだ。冗に遣つてはいけないよ。シタガ何も別に道樂もない男だから心配もあるまいが。どうーたもんだらうのう和平どん和「冗喰ひ一つーない堅い男ですが。二十両とは些と大金ですナ。冗に遣つてはいかんぜ多「私冗ナ事よゝ三文も遣ひやしねい。天下の爲めなら遣ひやす主「大きな事を云て。何よするんだ多「左様なら旦那様中上ますが。私毎日〜炭車に積んで青山へ往きやんすが。押原横町のれ組屋敷へは車と曳込む事が出來やーねへから。横町へ車を待たして置て。那所から七八町の長い間炭擔いで往きやんすのだが來年の二月頃までは霜解がーて。草鞋でも草履でも辷つて歩行けねへ。霜柱がハァ一尺五寸位もありやんーて。其霜解の中を歩行て參り。歸りに水戸様前の砂利の中へ入るもんだから。草鞋も忽ちぶつ切れて。日に二足位は入て。誠よ冗だァから。私思ふに押原横町から長安寺門前まで押原通りへ。ズウッと殘らず玄蕃石を二様よ並べて敷詰めたら。誠よ路が宜く成て皆の仕合せだと思ひやんすので。石買て敷きていから。金二十両れ貸しあすつて下せへ主「コウ〜れ前も分

らねへ人間じやァねいか。神田佐久間町のものが四谷の押原横町へ石を敷いてどうするのだ。入らざる餘計ナ事じやァねへか。殊に町内には組合もあるー冗な事だ 多「旦那樣。れ言葉を返しては濟みませんが貴所のお考は些と違ふふと思ひやんす。神田佐久間町と四谷の押原横町とは町内が違つて居るからと思召しては間違ひます。ソリャア町内は違つて居やんすが。押原横町の者も佐久間町を通る事もありやんす。又神田の者も押原横町を通る事もあつて。天地の間の往來で。世界の人の歩行く爲めの道かと。私考へます。江戸中の人ばかりじやねい。遠國近在の人も通るから。石敷いてあれば往來の人がどの位助かるか知んねへ。又此處な家から毎日彼處へ炭を送る時。出方のものを五十人として。日に十足の草鞋を切るとした所が大い事だ。一足を十二文と積つても千足萬足とあれば何程になるか知んねへから夫よりは石を敷き詰めて置くと。除程得でがんす。私聞いて見たら百年は受合て持つと云ひやんー

た。極堅い幅廣の長い石が。一枚五文だと云ふから。十枚では五十文。百枚で五百文だから。四百枚で二貫文。是だけも敷けば百年位は持て。草鞋の切れることもなく。貴所のれ得よもなり。天下の人が歩行く度にどの位助かるか知んねへから。世界の人の爲めに石を敷きやんすので。決して四谷の押原横町と見て敷くのじやァねへ。矢張お宅の前へ敷く心で居りやんす 主「成程恐れいりました。感服だ。のう和平どん 和「迂濶口出しい出來ませんなァ。此間の藁草履の勘定で驚きましたよ。コリャア殊に依たら得がついて返ることがあるかも知れません 主「二十兩出して石を敷くのは宜いが。お組屋敷で彼是云やァしないか 多「それも私が心配だから。彼處の手前の横町に石屋がありやすから。石を敷いて咎められやしねへかと聞いたら。傍には箪笥町の鳶頭が立て居やんして云ふには。己れがお組へ往て届けて呉れやうと親切よ。石屋の親方と。私と三人で一所に參り。お組屋敷のれ頭に届けやんーたら。れ頭も段々次第と聞き。

壺原多助一代記第十四編

大きゝ感心あことだ。往來の者の仕合で。決して咎めねへから。早々と歟くが宜いと。實ハれ組のお頭も得心なせへやした事です主「早いのう。感心だ。そんなら早速金子を持て往くがよいと。金子を渡そと多助は金子を懷に入れ提打を携けて佐久間町の家を出て。聖堂前ゑ掛り。櫻の馬場へ上つて參りました。只今では那邊も開けて。佐藤先生の病院があり。學校もありますが。其頃は樹木が生茂り。櫻の馬場の邊りハ淋しく殆んと日暮から往來するものもなく。時々剽盗抔が出るくらい淋しい所へ。今ゑ多助が藁草履を穿き。スタ〳〵やつて來る跡から。ピタ〳〵冷飯草履を穿き。半合羽ゑ小短れ太刀を差し。手拭で鼻被りとし草鞋穿で。田舍歸りと云ふ拵への男が。多助の傍へ寄り男「ヤイ。多助待てと。聲を掛けましたが。是は何者で御座いまそか。次に申上ませう

壺原多助一代記第十四編　終

壺原多助一代記第十五編

三遊亭圓朝演述
若林玵藏　筆記
酒井昇造　助筆

第十五回

救二危急一角右初名二其子一　數二貯蓄一善右更勵二其人一

多助のお話も大分長ちく續き追々結末の方ゑ相成ました。扨多助ハ道普請の金を持て四谷の押原横町へ出かける途中で呼びかけられましたゆゑ立留つて多「ハイ誰でがんす。どなただへと。云ひながら提灯の下から透して見ると。道連れの小平で御座いますゆゑ。喫驚致し跡へ退る小「ヤイ多助。三年跡ゑ手前能く己ゑ赤耻をかゝせやがつたナ多「汝未だ悪事が止まねへか小「止むも止まねへもあるものか彼の時は手前の爲めゑ化の皮を現わされ。立端を失つたから悪事を止めて辛抱するとは

云つたが。實は手前を遺恨よ思つて。附けて居たのだが。忙がしい身の上だから奥州へ小隱れをして居た所が。又ヅキが回つて漸と江戸へ出て來て。通り掛つた山口屋の前で。手前が提灯を點けて出かける時よ。主人が金を持つて居るから氣を注けて往けと云つたから。何んでも手前の懐中よたんまりあるだらうから出せ。金を强奪り裸體よもるのだ。殺しやァしねへが。身體よ疵を附けて三年跡の遺趣を返へもものだ。サ金を出せ 多「仕様かねへ。性分として汝惡事が止まねへか。己があれほどまで云つた異見を用ひねへで。惡い事をすると云ふ心根が如何よも情けねへ。よこせたつてとうして此金は遣られねへ。世界の人の爲めよ遣ふ大事な金だ 小「エヽ出しやァがれと。云ひながら多助の胸ぐらを取り。力よ任せて突き飛も。突れて多助ハひよろ〳〵と横よ倒れかゝりましたが。やつと踏み堪へながら 多「ナニィする。どうしても金は遣られねへ誰か來て呉れ〳〵と。喚鳴るよも搆わず。小平ハ拳を固めて力任せよ打落せバ提灯は地よ落て燃へ上り。小平は多助を捻ち倒し。乘りかゝつて續け打ちよする。此時よ多助か盜賊とか何んとか云へばよいのに。唯痛い〳〵と云つて居りまも。痛いよハ違ひないが誰も助ける人はありません。多助ハ金を奪られまいと挑み爭ふ 小「此奴小力があるなと。云ひながら懐中から匕首を取出し。サァ出せ。出さなければ殺すぞと。刃物を目先へ突付る時。小平の後の方よ立たる一人の士が突然よ小平の利腕を取つて逆さよ捻ち上げ。エイの掛聲諸共よ投げ附けまするとと。前なるお茶の水の二番河岸へ逆とんぼを打ち。ゴロ〳〵とぶんと。陷りました ゆゑ。多助は地獄で佛よ逢つた心持で 多「危ねい所をお救ひ下さいやして何處のお人だか有り難うがんします。アヽ痛い頭を割れる程打れた。丁度二十七打ちやんした 士「打れながら勘定をして居るものがあるものか。貴様ハ何處のものだ 多「ハイ私ハ佐久間町の山口屋善右衛門の手代多助と申しやんすが。仔細あつて今夜四谷へ往く道で。道連れの小平と

云ふ盗賊よ逢ひやしたが。三年跡私が異見をしたのを遺恨よ思つて私を殺もべいとする所を。お蔭様で命が助かり。誠よ有り難うがんす 士「ナニ多助とナ。左様かと。云ひながら彼の士ハ宗十郎頭巾を被つたまゝで。後よ提灯を提げて立つて居ます御家來を見返つて 士「コレ吉次。少々明神下よ買物があるから。遲くなるかも知れんから先へ歸つて旦那様ハ跡から直ぐよ歸へると。御新造よさう云へ 吉「ヘイそれでハお提灯を置て參りませうか 士「マア却へつて燈のない方が宜いから持てて往け 吉「ヘイ左様ならお先へ參ります 多「オイお供さん。大きよ有り難うがんしたと。云ふ間よ早や家來ハ急ぎ驅け下ります。跡を見送つて。お士が宗十郎頭巾を取つて首へ卷き 士「コレ多助。誠よ懷かしかつたなア 多「ヘイ貴所ハ誰人でがんす 士「三ケ年前其方が屋敷へ參つた時ハ義理あればこそ。親子と名乘らぜ。難面く其方を歸へした跡で。母が愚痴ばかり申して泣いてばかり居つたが。皆手前の爲めを思ひ能と嚴しく云つて歸へした

か八歳の時よ別れたゆゑ祿々顔形ちも分らないがナ。其方の實の親の盤原角右衛門であるぞ 多「エヽ親父様かアヽ逢いたよ御座りやしたと。云ひながら泣き出し。袴よ取付き 多「モシエ三年跡お邸よ參た時よ貴所が已ア實の子じやアない。全く百姓角右衛門の子だが。同じ名前の義理で汝を育てたのだ。自分の子ではねへと。縁切て向へ遣た義理合を立て仰りやんしたから。お顔をも見ぜよ歸りやしたが。彼の時の御異見が身よ染み渡て。山口屋よ只今まで辛いのを忍んで奉公して居やんす。私決して惡るさして國出た譯でハがんせん。跡で細かよお話を致しやせんだつた申せバ却て御苦勞を掛けやうと思ひ。委しいお話を致しやせんだつたが只川一筋向のお邸よ兩親があうあがら。御顔と見る事もならぜ。どうして御出でなさるか。壯健で御奉公なさるかと。人の噂を聞ては悦んで居りやんぜが。貴所も追ゝ取る御年。病み煩ひのねへ其内に。一遍お顔が見てへと思ひまして。信心して居りやした。どふぞ私國へ歸り家を建る

速記法研究會

まで。お壯健でお出でなもつて下ださる樣まと思てる願ひが屆いて。汝が實親の角右衞門だと。仰て下せへまして。私何より嬉しく有り難う御座いやも角「此方ま於ても誠ま悅ばしい。段々樣子を聞けば。山口屋善右衞門方へ忠義を尽し。實貞まして居る由。誠ま感服なるぞ。屋舗内でも其方の評判が宜しいから蔭ながら悅んで居た。又沼田の角右衞門の分家太左衞門と申もものより書面が來た所。なまの後妻の惡心よりと。其方の妻の心得違ひより。多助ハ家出を致せし跡まて。家ハ潰れ。多助まハ聊惡い所ハないと。云ふ事が知れたゆゑ。能々なし仔細もあちらと常ま其方の噂ばかりして居つた。どうか身体を大事ま奉公して。國へ歸り立派ま搗原の家を立てろよ多「ハイ〳〵。家を立てゝへと思ふばかりま。此樣な苦難を致もものでがんもが。親父樣ま此處でお目ま掛、ちうとハ實ま思ひやんせんでした。有り難い事だな。提灯を持て往て仕舞やしたからお顏が見られねへから。何處か明るい所へ往て。お顏を能く見てへもんでがんす角「左樣ならそれまで同道して參ちう多「お邸までお供して往き。お母樣まもモウ一遍お目ま掛、りていもも有ちう。夜中金などを持て外へ出るナ。山口屋善右衞門の宅まで送て遣う多「身分が違ふから仕樣がねへが。貴父でもお母樣でも。加減の惡い樣な事もなかんべいが。若有たちば山口屋の手代多助と云て。呼びまよこして。私逢はしておくんなせいヨ角「チ〳〵宜しい。其燃へた提灯を拾ひナ。サア同道致さうと一方は戸田樣の御家來まて三百石取りの身柄のお方が。見る蔭もない炭屋の男を送ると云ふも。親身の父子。多助ハ嬉し泪まハ暮れなから山口屋まで送られて歸りました。是から四谷の押原横町へ石を敷詰めて。道普請を致しまもお話しで御座いまもが。其石ハ明治四五年の頃まて殘つて居りまして。只今でも彼の横町の渠溝の淵まハ石片や何まかゝ積んで有ますが。玄蕃石の餘程厚いものので。側面まハ山口善右衞門手代搗原多助と。雕り附けて有りまもを。圓朝も儘かまハ見ま

した。正のお話であります。細ふくしい所は面白味が薄う御座いますから申上げませんが。多助も山口屋方へ奉公中。追々金を蓄め國の家を興たいといふ精神を貫きませうとするうち。月日の經つのは早いもので。十一年が其間奉公ゑ。陰陽なく實ゑ身を粉ゑ碎いての働き。子ゑ臥し寅ゑ起き。一寸の間も油斷せも。支体を苦め。身を惜まも。働きまする。十一年目は丁度明和八年で。其年の七月の盆は御案内の通りお商人衆ゝ掛け廻り抔でお忙しいもので御座いまもが。段々月末ゑ相成りまもると大概用も片付きました。多助は今年三十一歳。山口屋善右衛門ゝ五十三歳と相成り。主從親みの深い事他ゑ勝れ。善き心掛けの人ばかり寄まもるとは實ゑ結構な事で「善「多助や〳〵鳥渡此處へ來な多「ヒエヽお呼びなせいやしたか善「家の内儀とも話しをして居るんだが。お前もマア家へ來てから最う十一年ゑなるが。月日の經つのゝ早いもんだのう多「ハイ早いもんでがんもあア善「お前へも十年の年季ゝ勤め。禮奉公を三年勤めやうと云て骨を折て呉れるお蔭で。身代の助けゑ成た事も毎度あるんだが。最う奉公も充分だからこゝらで國へ歸つて。日頃望みの國の家を興てたら宜からうと思ふ。それゑお前も隱くして居るから私も聞きもしなかつたが。一體お前の國ゝ何處だへ多「ハイ誠ゑ有り難うがんす。只今までゝお尋ねが有りましても國の家の事や。私の身の上を申やせんでしたが。最う年季通り勤め上げ。お暇が出て國へ歸へるのも近いとんだから。お隱し申やせんが。實ゝ上州利根郡沼田下新田と云ふ所の百姓鹽原角右衛門の悴多助と申す者でがんも善「フン下新田と云ふのは。それゝ大分なんだナア。山の中の樣子だのう多「ハイ左樣でがんもか。私種々申もゑ申されやせん間違が有て。國の家が潰れかゝりやんしたかち。辛へのを忍んで居やしたが。母や女房が心得違への者で。私をマア殺すべいとまでゑ惡謀をされやしたかち。私も殺されてゝ國の家を興てる譯ゑもいけねへかち。私し出れゞ潰れるとゝ思ひやしたが。江戸へ參

つて奉公をし。金を蓄め國へ歸て家を興てやう。命有ての物種だ。跡方ハ潰れてもそれまでと思ひきり。國の家を出て江戸へ參りやしたが便るものはなく。仕樣がなくつて。忘れもしません十一年跡の八月二十日の晩ゑ昌平橋から身投げやうとする所を。旦那樣に助けられ。御當家へ參り長い間御厚恩を戴き。お蔭さまで炭の事から。書けもしねへ手も帳面位ハ附けられ。算盤も敎へて下さり。實ゑ旦那樣の御高恩ハ海よりも深く山よりも高く。死んでも多助ハ忘れやせん 善「アイ〳〵誠ゑ其志が如何ゑも感心だのう 妻「はんとうゑ感心だねへ。だから旦那樣が何時もお前を譽めて。あの多助の志は別段だと云つてサア。それゑ出入のものや店のものまで皆な譽めて居るよ。妾や旦那樣が譽めると外の奉公人ハ嫉みが有て惡く云ふものだが。お前ばかりは誰も惡く云はないのは全く平常の心掛けが良いのだと。旦那樣と自慢してお話しをして居るんだよ 多「旦那樣へお預け申たものはとの位ゑなりやした 善「預たものがアイヨ。和平や鳥渡帳面を持て此處へ來な。アイ〳〵と帳面を請取り。繰返し見ながら 善「多助。お前ハ給金なしゑ奉公をして呉れ。拾た物を賣り預けた金ゑ追々利が增して百四十二兩ト貳貫文となつたが。大おものだのう。それからお前が國へ歸へるのゑ。私も何んぞ骨折の禮をしなくつちやアならないが。多分の事も出來ないが百兩やる積りだ。それから悴が十兩。內儀さんが十兩。番頭が千疋。店の者中で千疋。車力鳶のもの出で方中殘らずで五兩。其外荷主樣ゑ戴いた御祝儀。煤掃き歲暮お年玉何ゑやかや殘らず帳面ゑ付けてある所を番頭ゑ寄せてもらつたら。丁度三百兩ゑあるが。微塵も積れバ山だのう 多「大く蓄りやしたナア。さうは蓄るめへと思ひやしたが。それへもんでがんす 善「此金を以て國の家を興て。きまりが附いたら今まで長い間心易くしたものだから年ゑ二度位づゝ江戸へ出て來る譯ゑハいくまいか 多「ハイ國の家を興てれバ二度でも三度でも旦那樣のお顏も見てへから出て參やすが。私家は國でも

三百石の田地持で。山も澤山持て居りやんしたが。母さまの心得違ひから山林田畠ハ人手ヨ渡り。家ハ燒けて仕舞てねへのでもから。國へ歸へり家を建て田地を買ひ戻し馬の二頭も買ふヨハ。三百兩でハ足りねへやうでがんす。それ丈け蓄つた金でハあるし。それヨ國で稼いでハ百が錢を儲けるヨも大騷きだから。最う些とべい此江戸で稼いで見たいと思ひやすがとうでがんせう 善「如何いふ稼きを仕て見る積りだのう 多「ハイ私別ヨ覺へた商買もねいが。長い間此家ヨ御厄介ヨなつて居りまヨしたから炭の事ハ少しべい覺へやんした。炭より外ヨ何ヨも知りやせんから炭屋を始めて見てへと思ひやんす。就きやして私此間お使の歸りヨ本所相生町を通ると。其所ヨ誠ヨ好い明店が有て。間口が三間半奥行六間で。小さい穴藏が壹つ有りやんして。前の河岸附きヨ小さい河岸納屋が有やもから。炭の荷を揚るヨも極都合の好い事で。それから直段を聞いて見たら二十五兩だと申やすが尤も疊建具殘らもて籠ハありやせんが。それハ跡で買ても好いが。二十兩位ヨぶんねぎつて買ふと思ひやすがとうでがんせう 善「至極宜ちう。獨りでやつきとやれバ又それ丈けの事も有ませう。炭ハ我の方から送るから仔細ハないが。此金を資本ヨして創めるが宜い 多「其金ハ貴所ヨ悉皆預けて置き。私獨りで稼ぎ出しやも。どうか此金を月々幾許といふ細くも利を產み出すやう一つ御工夫なもつて下さいやし。其内二十兩丈けお借り申て家を買て創める積りで御坐いまも 善「それハ宜いが。二十兩で家を買て仕舞てハマア炭や何ヨかを買ひ出すヨいけまいが。それハどうもる積りだナ 多「買ひ出さねいでも炭ハハア澤山有りやも 善「何處ヨ有るんだ 多「ヘイ私十年の間粉炭を拾ひ集め。明き俵へむやみヨ詰め込んで拜借致しやした大い明き納屋へ澤山打積んで有りやすから。それで大概宜かんべいと思つて居りやも 善「拾ひ集めた炭ドやア仕方があるまい粉ばかりだちう 多「ヘイ粉炭でがんす 善「其樣な物を買人があるか 多「有りやんすとも貧

乏人よゝ壹俵買ゝ不自由な譯で。中々一俵ゝ買へねへもんでがんすか。冬季などゝ困つて睾丸火鉢の中へ消炭抔を入れ。プゥ〳〵と吹いて慄へながら一夜あかすものが多い世の中で。裏店や何かで難儀して居て一俵買が出來ねへで困つて居るものが有りやんすから。其樣な人よ味噌漉よ一抔。高いか知りやせんが七文か九文よ賣りやんせゝ大く益よなり買ふ人も寒さを凌げるから助かりやすゆゑ。是を創めたら屹度繁昌しべいと思ひやす善「是ゝ感心うまい考だ成程宜かちう何か粉炭ばかり賣るも宜しいが餘程貯つたかへ直ぐよ賣り切れる樣ではいかんがどうだへ多「へイ勘定をしやしたら七百二十俵べい貯りやした善「ナニ七百二十俵だと優いものだなア多「へエ年よどんな事をしても七十俵位ゝ貯る勘定よ成て居りやすなア善「フンそんなよ粉が出るかの多「廢るものだが斯して有れゝ賣れやすが。あれで創めれゝ過分お借り申ても二十五兩でやる積りで御座りやす善「創ろ〳〵多「そんなら金をお貸しなすつて下さい。家を買て來やすからと。主人より二十五兩の金子を借り受け。直ぐよ本所よ參り。彼の家を買ひ取り。樽代を拂ひ。送邊へ店振舞を致し。其所よ住み込み。粉炭の俵を前の納屋よ運び入れ。これから毎日彼の粉炭を籠よ入れ。味噌漉を中よ置き。擔ぎ歩行きながら多「計り炭はようがんすか〳〵味噌漉よ一杯五文と七文でがんす。と云ふので御座いますが。この時分よゝ計り炭を賣るものがないから。珍づらしくもあり。一俵買ひの出來ない人々ゝ便利な事で御座いますから。一人買ひ。二人買ひ。十人百人と。好いことゝ忽ちよ廣まり。彼處此處で計り炭屋〳〵と云ふ樣よ相成りました。それから晝間賣り歩行き歸て參り。夜分は又門口よ大な高張を建て。筆太よ元祖計り炭鹽原多助。と記し轡の紋を附け。店で計り炭を賣りますと。裏店のおかみさん達が前掛の下よ味噌漉をかくし。一杯お呉れといふので。大層商ひが御座いますが。八月の十五夜から引續き十一月まで追々〳〵繁昌致して居りました。

速記法研究會

速記法研究會

ると其隣りよ明き樽買ひの岩田屋久八と申し。此人ハ年三十九歳よなる獨身もので稼ぎ人で御座いまも。多助も稼ぎ人なれバ互よ睦しく。毎日休む處が極て居りまも。夫れハ四つ目の藤野屋杢左衛門と申して。御駕籠御用達しで。名字帶刀御免の分限で御座ります。其藤野屋の裏手の板塀に差掛け。葭簀張を出す鰥婆さんの店があります。春ハ團子抔を置き。平常ハ鰯の足か茹玉子位を列べ。玉子ハない事が多いが。擂煎餅ハ自分で拵へまもから何時でもありまも。其外駄菓子ハお市。微塵棒。達磨。狸の糞抔で。耳ハ遠いがお世辭の宜い婆さまで御座いまも婆「オヤお早う御座いますねへ。何時でもお噂べかりして居まもョ。どうも炭屋さんと樽屋さんハ毎日刻限違ハも入らつしやると申してねへ。誠よ稼くお方ハ違たものですねへ。今日ハいつもよりお早いやうでも。マア御茶を一つと。差出もを請取り多「久八さんわもう來さうなものだなア。來た〳〵久八つあん。今日ハ負けたんべいと思つたが。矢張り己が早かつた久「やア多助さんか。今日ばかりは私が先きだと思つたのだが負けやした。私は粗〻かしいから。能く物を忘れるのだョ。今日も樽を買た家へ手拭を忘たものだから。取りよ返り遲く成たのだョ。婆アさんお茶一杯お呉れな婆「お天氣が能く續きます。毎度貴所方の御贈ばかり致して居りまもョ。此擂梅ではお天氣も續きませう。どうも春よならなければお團子も賣れませんョ久「雞だからあんな事を云つてる。お茶を一杯お呉れ婆「ハイこれハ氣が附きませんでしたと。云ひながら汲んで出もを久八ハ請取り久「多助さんハ、商賣を始めたなア多「マア仕合せな事でお得意先が日々増へるばかりサ久「好い事を考へた。之れは別だよ。譽める人もあり。中よハ惡くいふ人もあるが。何しろ考へがうまへねへ多「貴公も折角樽を買てお歩行きなさい久「だがねへ多助さん。かうやつて刺衣の筒袖を着。膝の抜けた半股引を穿き。三尺帶ヨ草鞋がけ天秤棒を擔いて歩行くのだが。未よハ立派な旦那といはれる樣よお互よならないでは。塡ち

ない旨い物ゝ喰ゝぜ。面白いものは觀ず。かうやつて居るんだものを。マアー生懸命ゑ十年の間稼いだら滅法ゑ金が貯まらうと思ふが。多助さんは幾許貯める積りだね　多「私は金貯める積は有りやせん　久「そんならなんだつて稼ぐのだ　多「そやりア稼げば金は貯るが。金を貯る樣な心じやァ駄目だ。私ァ蓄ちない樣ゑする積だ。おんでも金蓄めて油斷をしてはなりやせん。コレ金能く聞け。己見ろ雪が降ても風が吹ても。草鞋穿き　ゑ成つて。寢る目も寢ぜゑ稼いて居るゑ。汝はなんだ錢箱の中へ入つて、樂をしやうたつて。さう旨くゝいかねへ。稼いで來〳〵と金の尻つぺタを打つと。痛いもんだから。ピヨコ〳〵出て往て稼いで歸り。疲かれたからとうぞ置ておくんなさいと云つても。己ァかうやつて稼いで居るゑ汝そんな弱い根性を出してゝ駄目だ。稼いで來うと。云つて又尻つぺタを打つと痛いから又ピヨコ〳〵飛出しては稼いで來る。仕舞ゑゝ金が疲かれて最う働らけねへからとうか置ておくんなさい。最う何處へも往きません。貴所の傍ゝ離れませんと。云ふかちそんなら置いて遣るべいと云ふ。これが眞實ゑ天然自然ゑ貯る金と云ふものだァヨ　久「フゝ始めて聞いた。金の尻つぺタを打叩くつて。これゝ妙だのう。さうたが多助さん段々金が貯つて來ると使ゝなくッちやならない事が出來てくるぜ。交際で否でも應でも旨い物を喰ひ。好い衣服を着なければならない樣ゑなつて來るヨ　多「私中々さうゝさせねへな。着物が私が身ゑ付ふとすると。とんでもねへ着物だと云て。寄付ぜ。又旨い物だつて。己口へ入ちうとしても。そんな汚れた物ゝ己が口へ入られねへと云て。寄付けねへで打叩くから。さうすると喰物も段々ゑ疲れて來て。そんな事を云ゝぜゑとうか少しべい喰てゝ呉んなせいと云ひ。着る物も。貴所の傍を離れねへからとうか着てくんろと。己身體へ附着いて離れねへと云ふから。そんなら着てやらう喰つてやらうと云ふのだこれゝ求めぜして天より授かる衣食と云ふ物ゑ久「ヘイ成程考へたねへ。旨い考へだなア

フヽン多「お前ハ明樽買ひヨ。私ハ計炭やサ。お前ハ精出して。明樽を買ひ。
已ハ又なんでも搆わぬ精〳〵と計炭を賣るこれが天地への奉公ヨ。計炭
やハ計炭や。明樽買は明樽買。お待ハお待。大尽ハ大尽旦那様ハ旦那様。こ
れハ皆其人の徳不徳よりあるのだから。なんでも搆わぬそれ丈けの稼ぎ
を精々と遣るがようがんす。金を貯る心を起してハいけねへ。なんでも
貯ねへやう。家よハ寄せ附けねへやうよ働かせ。己貧乏だなんといふ心
を廃よして仕舞て。唯、無茶苦茶よ天地へ奉公をして居さへすれば。天運
で自然と金が出來。天がそれ丈けの樂をさせて呉れるから。なんでも邪
な心を起し。一時よ澤山儲けべいと思て。人の物を貧るやうな事をしち
やアいけねへ。隨分大い投機を工んでやれば金ハ出來べいが。其金ハと
うしても身よ附いてはいねへ。若し其身よ附いてゝも。其子の代よハ急
度消る譯のもので。火事盗難といふ物が有るから。どんな大い身上でも
續いて十度も火難よ出逢ひ。建る度よ藏までも焼いたら堪るものトや

なかちう。だちうとうしても無理よ貪ると又無理よ出て往く譯だから
無理のないやうよ金は働かせ。遊バせねへやうよもるのが吁心だヨ久
「成程多助さん。そこへ考へが附かなかつたから。かうやつて齷齪辛ひの
も厭わないで稼ぐのは今よ立派な旦那よならうと思ふからだが。能く
なるのもわるくなるのも皆其人の徳不徳で。明樽買ハ明樽買ひかねへ
多「立派な旦那様よならないでも正直よして天地の道に欠けねへ行ひ
をして居れバ。誰よも愧る所はねへから。何よも搆つた所ハねへ久「恐入
たねへ。成程尤へもんだ。これからハ金の尻セタを打叩くとしやうヨ。毎
日此處へ休みなかちお前の云ふ話が皆爲めよなるよ。あの先達て鳥渡
聞いたが神田の方ではお前の噂が高いヨ多「ナニ譽められたつて油斷
は出來ねへ。悪く云われやうが。善く云われ様が此方でへさ間違ひをし
なけれバ愧る所はねへから安心だ。皆天地への奉公死ぬまで骨折て遣
りやせうと。茶を喫ながら四方山の話を致して居りまも自ら經濟法

が正く儉約の道よ適て居りまもる。樽屋の久八も根が正直な人ゆゑ肝よ銘ドて感心を致し。兩人で長話をして居まも處へ年頃四十八九よもならうかと思ふ。女乞食が俄か肓と見へて感がわるく。細竹の杖を突き十歳ばかりの男の童よ手を引かれながら。ヨボ〳〵して遣て參り。ボロ〳〵した荒布のやうな衣服を着。肩は裂け。袖い斷切れ。おそろしいなりをして居ります小供い鼓蕾張よ並べてある大福餅を見附け腹が空たと見へ童「お母アノ大福餅を買てお呉れなエヽ」母「そんな事を云てもお前御錢が有りません。何を大きいのを。そりやア迚ても買やアしねへ愛よ三文しかないから。三文丈けお菓子を賣てお貰ひ。モシお願ひで御座いますが。小僧がお腹がもきまして。お店の大福を見て喰べたいと申まもが三文しか御座いませんが。これで一ッおまけなすつて賣て下さいませんか」久「オイお婆さん。小僧がお腹がへつたから大福を賣て呉れろと云つてるせ。負けてやんねへヨ」婆「誠よ好いお天氣で」久「アレ仕樣がねへなア。乞食が大福餅をまけてくれろと云てるんだ。錢が足りねへといふからまけてやんなヨ」婆「ハイナニ負けてくれろ。持ていきな。負けてやるよ。アヽ忘やみよ手を出していいけない。サまけてやるから燒過て堅くなつたのを持て往きな」母「有り難うぞんドまもと。云ひながら大福餅を請取り。小供よやる。小供いガッ〳〵して喰べて居るのを。多助い其母の姿を視て。喫驚致しましたが。此乞食母子い何者で御座いませうか。式回までお預りよ致しませう

三遊亭圓朝演述
若林玵蔵筆記
酒井昇造助筆

第十六回

説二來路一盲婦偏懺悔
察二前途一奇女切戀慕

多助が彼の鼓簧張で盲目の乞食を見て喫驚しましたハ十一年前沼田の下新田で別れた。一旦自分の母親よなりし實の叔母お龜よて。沼田の家も此惡婦の爲めよ潰れたので御座いますから多助ハ心の内よ。アヽ叔母御も心がちとハ云ひながら盲目乞食とまでなりさがるとハ皆な天罰と思えげも。傍を見ると樽屋の久八が居まをから聲も掛けられを。何か心よ思案を定めまして多「久八さん。私少し用が有やすから誠よお氣の毒だがどうか一足お先へ往ておくんなせいな。直よ跡から出掛や

す久「ハァそんなら先へ往きませう。オヤ〳〵茲の所ハ三軒なから明き店ゑなつた。かう云ふ日あたりのいゝ所が明てハ困るねへと。云ひながら荷を担ぎ久「明き店ハでざい〳〵多「オイ久八さん。明き樽じやァねへか久「さうだつた。粗忽かしいから仕方がねへ。明き樽ハでざい〳〵と。流して往く後ろ影を見送て。多助ハ右の穢ないお龜の手を取て多「叔母さん此處へ掛けなョ母「ハイ何誰様で御座いますか有り難うぞんじます。俄か盲目で感が悪ふ御座いまして難澁致しまス多「マァ此處へかけなョ。子供も掛けな。叔母さん貴所ハマァどうして此様ゑ零落たョ龜「ハイ何誰さまで御座いますか多「十一年跡沼田で別かれた貴所の甥の多助でがんスョと。いはれてお龜ハ顔色かへ龜「エヽ多助殿か。面目ない〳〵と。云ひながら思はず識らず様臺から下へ落ち。大地ゑ兩手を突てハラ〳〵〳〵と涕を流しまスるを見て多「叔母さん面目ねへと云ふ事が分かりましたかへ。なさけねへ貴所もマァ元ハ八百石取りの御侍の家ゑ生れ。お嬢さまとも云はれた身が。若い時分から心掛けが悪く。若侍と不義をし家を驅出し。緣有て子供が出來たが其男が死んだ後ち。緣とは云ひながら私が八歳の時ゑ貰われて往た。養父擔原角右衞門様の後妻となり。假りゑも一旦親子となる中ゑ父様が不圖江戸から連れて戻たお前の實の娘お榮を父様が血統の從兄弟仝志ゆゑ夫婦ゑしたら睦しからう。此様な芽出度事ハねへつて。死ぬる臨終ゑ枕元でお榮と婚禮の壽盃をしたゑ。貴所は死んだ父様の御遺言を忘れ。四十ゑ近い身を持ちながら。原丹治と姦通をするのみならず私といふ亭主のあるお榮を勸め。丹治の悴丹三郎と密通をさせ。實ゑ畜生とも何とも云ひやうのない行ひではがんせんかへ。あの時ゑ私がことを荒立れば血で血を洗ふやうなもの。詰り家の恥ゑなりやすから擔原の家名ゑ疵を附けめへと思ひ堪ちへて居ると。二十歳ゑもなるものを小僧子の様ゑ使ひまわし。それでも私蟲を堪ちへて居りやんしたが。仕舞に殺すべいとするから

私家出をすれゝ其跡へ原丹治親子が乗込で來て。塩原の家ゝ潰れて仕舞ふのは知てゝ居れと。命さへあれバ江戸で奉公をして金を貯め。國へ歸て來て又家を建る工夫もあるべいと思ひ。辛へのを忍び國を出る時ゑ纔かゑ六百の錢を持て來たが。途中で惡漢に出逢ひ。難行苦行して漸く江戸へ着いた所が便る所もねへので身投げて死なふかと思ふ所を助けられ。其人の家ゑ十一年の間奉公をして。漸〳〵人ゑなりやした。只今では搶ぎ商ひとゝ云ひながらどうやらてうやら小い家を一軒持ち。竈を建る身ゑなりやしたからてれから稼いで金を貯め國へ歸り。塩原の家を建てる積りでがんもが。貴所のゝアア其姿ゝなんだへ。それから私い能く知らないが國の家ゝ燒けて仕舞たつて。貴所ゝゝアアとふいふ譯で乞食ゑなんなもつたへかめ「ハイ〳〵」面目次第も御座せん。お前ゑ又此處で逢ふのも皆お天の罰で御座いまも。お前が云ふ通り血統の甥を私の子ゑして娘を妻せ。何一つ不足のない身の上となつたのゑ。思案の外の淫逸とゝ云ひながら。年甲斐もなく原丹治と姦通を致し。お前を虐り出した跡で。丹三郎をお榮の養子ゑ入れたのも名主と話合ひの上村方で誰獨り非の打ち人のないやうゑして。婚禮をさせやうとする處へ分家の太左衛門が聞附けて來て。大變ゑ立腹し掛合を始め。大間違が出來。丹三郎ゝ若氣の至りで腹立のまゝ五八を切殺し。太左衛門も斬て仕舞と云て追掛けて往と。飼馬が馬小屋から飛出て。丹三郎ゑ噛み附きお榮も丹三郎の樣子を案じて其處へ往く所を馬が噛み附き。兩人とも馬ゑ噛殺され。お前の警を馬が討たやうなもので。今考れバ天罰とゝ云ひながら怖ろしいことだと思て居りまも。すると太左衛門が逃げて觸れた。と見へて村方の百姓が大勢集り。私達を打殺せ〳〵と騷き立てゝ。垣の周圍を取卷かれた時ゝ仕方がないから有金を小包ゑして身支度をし。お榮と丹三郎の死骸を藁小屋ゑ投げ込んで火を放け。漸々裏手から落延びまして。四萬の山口村へ身を匿して居まも。因果と懷妊いたして

ねへ。其翌年の九月産み落したのゝ此處ゝ居ます。此四萬太郎と云ふ悴で。これゝお前とゝ敵仇士の原丹治の子で御座います。それから古郷忘し難しとゝ能く云たもので。最う一度江戸を觀たいと思ひ。お尋ね者の身の上だが。丹治殿と私ゝ生れ落ちてまだ間のない乳兒を抱へて山口を立ち。江戸をさして來る道の横堀村で又旗のお角婆ゝ出逢ひ。其家ゝ泊たのが運の盡き。道連れの小平といふ惡漢が丹治を斬り殺しました。尤も丹治もお角婆と仝類の仁助とを殺しましたから。其隙ゝ私ゝ死物狂ひ。どうかして落延びやうと思ひましたが。小平の爲めゝ吾妻川の深い所ゝ蹴落され。既ゝ私も此子も助かりやうのない所へ北牧村の百姓清左衛門と云ふ人が通りかゝり助けて呉れました所。縁有て其家ゝズル〳〵ベッタリ。連れ子をして後妻ゝ成て居ますうちゝ。清左衛門ゝ三年跡亡なりましたゆゑ其悴が桐生から歸って來ました所。私の心掛けが惡い所から遂ゝ離縁となり。此子と一所ゝ追ひ出され。據なく又四萬の山口へ參り實ゝ湯場の賄ひ女をして居ますと。一昨年からの眼病で。去年の暮あたりからパッタリと見へなくなり。感が惡いものでもから賄ひ所じやありませんゆゑ。出て往け〳〵と虐られても泣き附いて居りましたが。仕方がありませんから此子を連れ。此七月下旬から江戸へ出て來ましも道々も乞食をしながらの事ゆゑ道も捗取らも野州路へ廻り漸々の事で江戸へ來ましたも萬一したらお姉様ゝお目ゝ掛る事もあらうかと思ひ參りましたが。一昨、日から何ゝも喰ぜ私は厭ひませんが此子が如何ゝも不便で御座いましが親の因果が子ゝ報ひ。何ゝも知らぬ此子が如何ゝも不便で御座いましを見る影もなひ此様姿でお前さんゝ逢ひ。實ゝ面目次第もない事で。斯う云ふ身の上ゝなりますのも多助さん。皆お前の罰だ。私ゝ今初めて氣が附きました。目が覺ました面目ない。どうぞ堪忍しておくんなさい。許しておくんなさいヨウ多「お前マア許して呉れ堪忍して呉れと云ふが。物の

多助旧怨を捨て母子を救ふ
おろめ
万太郎

塩原多助
おそる

理合を能く考へて見なせい。人と云ふものゝ忌ある物の長と云て此位な自由自在な働きをするものゝねへのだ。向ふへ往きてへと思へば自然と向へ歩行て往かれ。寢たけりや横ゝなり。喰いたけりや茶碗と箸を持て飯をかつこむ樣ゝ拵へてあつて。肩があるから着。口があるから喰ふやふゝ具はつている人の骸だから只能く働ひて天道に欠けぢ。骨折てさへ居れば。自然ゝ喰べられる樣ゝなつてあるのだから喰へねへ。着られねへといふ事ゝねへ筈だが。そこがそれ情慾ゝ迷て。思ふ儘。欲しいまゝゝ貪り。憎いの。可愛いの。嫉みだの。猜みだの詐り。僻みだの抔と。仇なちぬ人を怨ゝして末ゝゝ我から我身を捨る樣な事になり。路頭ゝ迷ふ人も世間ゝゝ夥多とあるが。假令一遍惡い事をしたつて改心する時ゝゝ直ゝ善人だから貴所完く私が罰だつた。私ゝ濟まないと。心附いたら私助けて上げやせう。だが死だ親父の位牌ゝ對してもすまねへから家の閾を跨がせる事ゝゝ出來ねへ。義理だから裏の明店へ入れて置き。喰

ひもの丈けは日々送て呉れべい。それから此子が最う些と譯が分る樣ゝなつたら己ァ内ゝ引取り眞の他人と思ひ。奉公ゝ置て。算盤や手習位は私が仕込んで喰ひ方の附く樣ゝ工夫してやんべいが。貴所私を甥だの。前の悴だのといふ心を出してゝ濟まないョ。叔母とも甥とも思はぢ。眞の他人と思て居なければ國の亡父のお位牌ゝ對してすまないョ。名ゝかへ「それじやァ敵仇士の此丹治の子をお前ゝ得心の上で目を掛けて育て、おくんなさるか。誠ゝ有り難うぞんドまも。どうぞ助けておくんなさいと。兩手を合せ多助ゝ向ひ神か拝のやうゝ只管拜みまもるを視て多「そんなゝ心配しなさるな。何の樣ゝもして遣るからと。多助は茶代を拂ひ。彼の穢い見る影もないお龜の手を曳て。炭の荷を擔いで歸へりましたが。霜月の事で御座いますから人通りも滅太ゝは有りませんから誰も知るものは有りません。もると先程より藤の屋杢左衛門の娘お花と申て。今年二十一歳ゝ相成り。近邊で評判な別品の娘ですが。不

思議な女で。御用達のお嬢様で有りながら。絹布を着た事い有りません。尤も外へ出ます時ゝは御両親のお恥ゝあるともないと申して着ませもが。宅ゝ居る時ゝどうか綿服ゝして下さいと申し。頭も飾らせ。白粉抹ゝ更ゝ扮けもせ。誠ゝ清素とした娘で御座いませもが。自づと氣象が氣高くても威嚴は有ません。心掛けの良い娘で御座いませ。多助が日々裏の茶見世へ來て話をもるのを聞て感心致して居ました處へ。今日はお龜といふ叔母か參りましたのを多助が段々と意見を加へ。敵仇志の親子をば助けて遣ふと云ふ志は誠ゝ感心な事だと。年はまだ二十一歳で御座いますが心ある娘で多助の往く後影をしみ〳〵眺め見惚れて居ませと。廣間の傍ゝ土庇を深く取た。六疊の小室が御座いませ。其處ゝ藤の屋李左衛門が居まして李「花や〳〵何を視て居るのうと。云われてお花ゝ心附き花「お父さま。あの毎日あもこの鼓蕾張ゝ炭屋さんが休んで居まもねへ李「彼ゝ中々感心な男だ。只の人間じやない。計り炭を賣るなぞと

とうも工夫が旨い。それゝ云ふ事が皆な異つて居るヨ花「毎日明き樽を買ふ人と話をして居もが。どうも不思議な事を申ませ。あのお方ゝ今ゝ立派の御方ゝなりますすねへ李「尋常者じやないのう花「お父様家へもいくらも人か來ませもか眞實ゝあの炭屋さんの樣なお方ゝ有ませんねへ。今日といふ今日ゝつく〳〵あの炭屋さんゝ妾ゝ惚れ。と云ひかけ親父の顏を視て。恥かしさうに下を俯き眞赤ゝ成りました李「何か。彼の炭屋ゝ花ゝ惚れたか。ウン惚れても好い。能く惚れた。已れも惚れて居る感心だ。あの襤褸の半股引刺子の筒袖で。眞黑けへゝ成て居るのだから色香ゝ惚れたのでゝない。炭屋の心ゝ惚れたのだらうが。李左衛門も鼻が高い。流石ゝ藤の屋の娘だ。宜しい貴樣が強つてあの炭屋の所へ嫁ゝ往き度と云ふなら遣てやらうか花「お父樣眞實で御座いますか李「往きたいか花「眞實ゝあんな人ゝないと思ひませ。彼處へ嫁ゝ遣て下さいませれゞとんなゝも親父樣ゝ孝行致しませる李「ナヽ感心だ。能く云た。どう

も平常乙な理屈を云ふ丈けお前の心底が宜しいが。併しあの炭屋ゝ何處のもんだか家が分らないで困まるが。明き樽買ひと懇意な樣子だから彼奴を呼んで聞いて見たら分らうが。然るべき媒妁を頼み。娘を貰つて下さいと云たら急度炭屋ゝ御刑達の娘ゝ嫌ひだぐらいゝ隨分云ひ兼ねへ男だから。兎も角も明日明き樽買ひが來たら呼んで呉れ相談をして見やうよ。コレ〳〵よしや明日ノウ。あの粗〻つかしい明き樽買ひが來たら少し用があるから呼で呉れ。門の方から入れもよ裏口の外庭の方から入れて呉れろいゝか下「畏りました」と其日ゝ暮れ翌日よ相成りまもと。時間違ひも例の通り久「明き樽ゝどさい〳〵」と流して參いりました下「チョイト明き樽やさん久「へイ〳〵那處樽で御座いまも下「アノ旦那樽がなんだか鳥渡お目よかゝりたいからと仰いますからとうぞ庭の開きから入て下さいまし久「何誰樽でエ。驚の屋樽で。是ゝ誠よ有り難いことで。成丈けお直段を能く頂戴いたしまもから外へお拂ひよならも私か頂戴致し度御座います。エヽ樽はおいくつ御座いまも下「旦那樽が少し御相談申度い事が有ますからと云ひながら。ギイーッと開き戸を明け下「此方へ御入んなさいヨ久「デ御座いまもか。ヘイと。中へ入りまもと。庭の清潔な事。赤松の一と抱へもあるのがあり。其下よ白川御影の春日燈籠があり。檜の木の植込み。錦木のあしらい。下草の樣子。何やかや申分なく。鞍馬と御影の飛石よ。敷松葉から。霜除けの飾繩。打水を致し洗ひ上てあります。土庇が深くなつて居る六疊の茶の間が有まして。其處よ坐左衛門が坐つて居りまして坐「サア樽屋さん。ズット此方へ來てお呉れ搆わも開けて此方へお入り。よしや入てあげなョ久「ヘイ〳〵只今草鞋を脱て參りまも。石が箇樽ゝ洗つて御座いますから坐「イヤ搆ひもも遠慮をしてはいかん。アヽ松葉の中へ踏み込んではいけない。其天秤棒ゝ片附けてお呉れ。アヽ石燈籠へ建掛けては困る。能くお出でありつた久「お初よお目よかゝりまも。私ゝ岩田屋久八と申まも樽買ひで御

座いますが。何分御贔負を願ひます　李「マアこれへ腰をかけておくれ。石の上へ手を附てゝは困るヨ　久「誠ニお立派なお住居で御座います。斯ういふお廣ひお宅へ初めて拜見致しました。あのへこんで居ます處へなんと申ます　李「あれかへ。あれは床の間だァね　久「ヘイ私はへこんで居ますから凹の間かと思ひました。お座敷が大層續いて御座いますなア。彼處の方へ小いお座敷が有ますがあれへなんで御座います　李「あれは便所だヨ　久「ヘイ誠ニ結構なお住居で御座います　李「花やお茶をあけなヨ　花「ハイと。耻かしさうにお茶を汲んで久八の前へ置く　久「ヘイ〳〵是は有り難う存ます〳〵と。云ひながら茶碗を手へ取揚げて。視ますると古染付の結構な。たつぷりした煎茶茶碗を象眼入の茶臺へ載せて出しますから　久「ヘイ〳〵恐入ます。惜しい事ニ周圍がボッ〳〵瓦げて居ますナ。些とお茶がお冷暖樣で御座いますも　李「イヤ餘り熱いと苦くて飲みにくいからだヨ　久「ヘイ戴きますも。大層甘う御座いますも。お砂糖でも入て居ますかナ　李「お菓子を上げなヨ　花「ハイと云ひながら。蕎麥饅頭。時雨。饅頭なんぞを紙の上ニ山盛ニ致し。久八の前ニ差出だす　久「てんぢニ戴けません　李「皆食ておくつても宜しい餘たち持て歸て小供ニおあげな　久「これは恐入りました。御大家樣ハ違たもんで御座いますナ。一寸御菓子ニも饅頭を三十も四十も積上げて御出しなさる。大きなもので御座います。矢張其人ニ備はる德不德で。私なぞハ精出して明き樽を買て歩行くので御座いますな。有り難うぞんじます。時ニ樽はおいくつ御座いますナ　李「樽を賣るのドやない少し相談をしたい事が有ますのだが。久八さん誠ニ耻人た事でもが藤の屋李左衛門折入て此通り手を附て願ひ度事があるのだが。どうぞお聞濟みを願ひたいと。これから緣談の事を申入れるといふお話しでございますが一息つきまして直ニ申上ます

塩原多助一代記第十六編　終

塩原多助一代記第十七編

三遊亭圓朝演述
若林玵藏　筆記
酒井昇造　助筆

第十七回　企圖不逢眞奇遇　意氣相投是良緣

多助が身代を仕出しまするは女房が惡るくつてハ迚も身代を大きくする事ハ出來ません。多助の女房となりますのハ前回ゟ申上ました通り俺用達し藤野屋杢左衛門の娘お花で。實ゟ別嬪で俺座います。女は容貌形ばかり美つても心掛が惡るくつてハ何ゟもありませんが。此お花さんハ海も山も備つた實に何とも云へない佳い娘で。此俺用達しの娘が計り炭やへ嫁ゟ行くと云ふハ實に妙なもので。緣と云ふものハ不思議な譯で隨分大仮ものも東京ものと夫婦ゟなり。東京のものと長崎の

ものと夫婦になり。只今では歐羅巴の人と日本の人と教會で葡萄酒と呑んで婚禮をすると云ふ世の中よなりました。が緣ハ妙あるもので座座います。之れと障子よ譬へて見ますと。障子よ遣ふ木ハ何國の山の木か知りませんが。それへ美濃で製した紙を張て障子よなります。骨バかりでも。紙バかりでも。障子にハなりません。此二つが持合て一つのものよあります。から心掛の惡るい女房を持ても惡るい亭主を持ても捨てる事ハ出來ません。圓朝の様な穢あい衣服ハ南部で出來た表よ青梅飯能邊で出來ました。裏を附けますと一對の夫婦で。表ハ亭主。裏ハ女房ですから。折目正しく整然として居れバ一對の夫婦で。座いますが。ろれと亭主の方で浮氣の染をつけたり。女房の方で嫉妬の燒け穴でも拵へたり。何かすれバ之れを離して外の裏と合せると再緣よなるやうなもので。合せものハ離れものでで座います。いつでも折目正しくして居れバ整然として二世も三世も夫婦に成て居ります。夫婦ハ三世と云ふ緣合のものですから少しの嫉妬位で私ア出て往くから一本お書きあんて。全体女が男よ一本書けあんと云ふのはおかしいわけで座います。其時座亭主が癇癪が起つて居りますと直ぐよ三行半を渡して出されますと。合せものハ離れものので。再び歸へる事ハ出來ないから嫉妬の起つた時ハ嫉妬腹を立つてハいけません。嫉妬ハ疑り。疑りハ嫉妬の玉子で。女房が旦那ハ何處かへ女か何か出來やしないかと思ふとろれが嫉妬の玉子で。すると座亭主のする事なす事さう見へます。旦那が少し春氣で頭髪が痒い、から床屋を呼びよやつて呉れと云ふと。ハテナまだいつもより少し刈込みがお早いがそれよハ何處かへお出なさるのだらう。それよ此間香水の良のを二本買てお出てなすつたのハ變だなと。胸がムカ〳〵と妬氣が起つて。さうなると聲の出かたが違ひます女「お召し物ハ何が宜しう座います亭「そんなよ良のはいりません。結城紬の着物よ絹中の羽織で宜しいと云ふと。いつもハお召縮緬の召物だが

今日は誠いおありをして見せやうと思ってと。又モヤ〳〵として女「車を云ひ附けませうか亭「車は外で乗りますから宜しいよと云ふと。ハ・ア家へ知れおいやうよ外でお乗りなさるなと思ひ。又モヤ〳〵としまして極お毒で座坐います。其嫉妬の起た時結搆な一首の歌がありますからお敎へ申ますと「雲曇れぬ淺間の山の淺ましや人の心を見てよう止まめ」と云ふ歌ですが。モヤ〳〵と火の燃へるやうで誠よ淺ましい了簡で。座亭主が浮氣をしたかどうだか能く見て妬氣と起せばい・よ。そこで人の心を見てよそ止まめと云ふので座います。それですから妬氣の起つてモヤ〳〵とした時は「雲晴れぬ」さうはいけませんがお氣を注けあそばせ。扨て多助のお話しで座いますが。お花は多助の志を見抜いて嫁に往きたいと云ふのですから浮氣のやうで浮氣でない。親父もお花か多助の所に嫁よ行きたいと云ふのと聞て心嬉しいから李「扨て樽屋さん久「誠よ有り難い事で。樽は幾個座います李「樽ではない。お前さんと毎日一所よ家の側の拔寶張よ休んで話しをして居る炭屋さんは何處の人ですエ久「彼は私の隣家で李「お前さんの家と知らない久「本所相生町で座います李「アノ炭屋さんはれ神さんがありますか久「エ・彼の人は八月の十五夜に店を開いたばかりでまだ神さん所ではありません李「ヘイ何處の人だエ久「上州沼田の人だと申ますが。誠よ面白い人で座います李「左樣かへ。彼の炭屋さんは女房を一人世話としして座貰ひ申たいが。强て往きたいと云ふ人があるんだから女房よ持て呉れやうかヲ久「ヘイそれは宅の座膳炊ですか。役の人は男振は宜しう座いまそか。何しろ眞黑に成て働きますから紺屋なら眞青だが炭屋だから眞黑でどうも李「誠に恥かしいが。よれよ居るのは私の娘で。年は廿一よ成て蠶よ立て。誠に良縁がありませんが。彼の炭屋さんを見て嫁よ往きたいと云ひ。私も遣りたいと思ふがお前さん媒妁に成て貰ひたいものだ久「何誰樣をエ李「よれよ居る娘で久「ヘイ〳〵此お孃

藤野屋の主人縁談を久八に依頼す

藤野屋本左門

娘お花

樽屋久八

速記法研究會

様。アハ、、、、、作申談ばかり云て。作大家様抔へお隙でお退屈でいらつしやるものだから。樽買を呼んで遊ばふと云ふ作申談で作坐いませう 杢「詐りでもありません。藤野屋杢左衛門へ帶座作発でありますが此通り手をついてお願ひ申ます 久「そんなら眞實で作座いますか。アノ間違ひでもありませんか。計り炭屋で作座いますか 杢「左様 久「何處がお見込でお嬢様へ嫁に入つしやいますな 杢「姿形ちよ惚れたのでへない。唯た一ツ娘に見込があります。只た一ツ臍から二寸ばかり下よ見所があるのサ 久「へイお嬢様へ何處のお湯よ入つしやいます 杢「あアよ心よサ 久「ハ、ア成程。心へ二すばかり下ですね。お嬢様眞實で作座いますかと云へれ。流石へ處女氣よ眞赤になりました 久「彼へ感心で作坐います。佐久間町の山口屋善右衛門の所よ奉公として。白鼠と云はれる位で彼れへ變つて居ります。それとお嬢様が見拔いて嫁よ入つしやる。貴所が遣りたいと仰しやる。彼の人も仕合せですね。宜しう作座います 屹度お世話致しませう 杢「眞實かへ 久「どんな事がありましても屹度お世話とします 杢「ア、そんなに煙管で青磁の火入を叩いてへ瑾がついていけないョ。そして其煙管へ私のじやないか 久「ふれへ旦那様のお煙管で。とんだ粗匆をしました 杢「オイ何處へ騙出して行くんだ 久「ア、又間違ひた。煙管の吸口を洗はうと思つて私の口を洗つた 杢「何の事だ 久「宜しい屹度お世話申ます 杢「ア、未だ用があるョ。オイ〳〵其地へ行ちやアいけないョ。アラ垣根を跨いで出て行つて仕舞た。粗匆かしくつて仕様がない。夫より久八へ急いで多助の宅へ參りまして 久「多助さん〳〵。どうした 多「もう歸つて來さうなものだと思つて待て居た。ア、〳〵草鞋を穿いたなりで家へ上つちやアいけないじやないか 久「多助さん慌てなさんな 多「お前が慌て、居るんだョ 久「多助さんお前の云ふ通り運へ天から授かるア。お前知つてるだらう藤野屋杢左衛門さんサ 多「ウ、ン藤野屋知つてるョ 久「どうも頭髪がこんなでどうも 多「藤野屋の頭髪がか 久

あァよお孃樣がサ。年が廿一で美女だねへ。それがお前の所へ嫁よ往きたい。遣りたいと云て。藤野屋の旦那が椽側へ手をついて。お前さんに媒妁を賴むと云つて。どうも美女だお前に見せたいヨ。ア、云ふ大家から嫁が來るつてお前ハどうも仕合せだ。どうも大きな家だヨ。座鋪が幾間も〳〵あつて。庭も大變立派だヨ。其かわりよ掃除が屆かないチ松葉が一杯にこぼれて居るヨ。而うして良菓子を。ア、忘すれて來た惜しい事をした。それで茶を入れて。ぬるいのがいゝのだつて。甘い良茶で。どうもアノお孃樣。お前お貰ひよう〳〵〳〵多「お前の云ふ事ハなんだか些とも譯が分らない久「嘘じやァあい。お貰ひなさい多「藤野屋の娘ハ己見た事ハあるが美女だ。全くさう云ふのか久「全くつて藤野屋の旦那が手をついて賴み。お孃樣が眞赤よ成たヨ。眞實だヨ多「お前ハ今年の十五夜から交際て居て。口と心と違つた事ハねいから。正直な人だと思つて居たが。お前遊ぶじやァねいなァ久「遊ぶじやァねい。お前より此方か遊ばれると思つて居たら眞實だつた多「眞實よ藤野屋奎左衛門が獨り娘を己に呉れると云へバ。藤野屋ハ横着な奴だあァ久「なんて横着だ多「己が働きを見拔いて彼奴が嫁よよおさうと云ふのハ。どうも油斷があんねへ。駄目だから斷つてくんねへ久「ナニ斷る多助さんお前勿体ねへ事と云ハねへもんだ。彼れを貰へバ長持が幾棹。田地が幾許來るか知れねへ。これが眞實の天から授かつて來た寶じやァねへか多「駄目だねへ私ア計り炭。先方ハ用達して。金ハあんべいが。幾許有ても使へバおくなつて仕舞。己ア稼ぎじやア夫婦倶稼きでなければあんねへよ。先方ハお孃樣だから飯ハ炊けねへし。味噌漉を提けて買物よも往かれめへ己ア家へ來ても女中でも一所よ附て來て朝寢をして。お引ずりで。銀の股引を穿いた箸をチャラ〳〵云わして。飯を食つて居ちやァ飯が食へねへさうすると幾許有ても直ぐよ金がなくなつて仕舞ふ。身代の爲めよならねへ。釣合ぬハ不緣の元だからお斷りす。往つて斷つて來てくんね

へ久「フウン成程。お飯ハ炊けねへ。己ァ一途ヨ宜と思つて屹度世話をすると云たから斷るのハ間が惡いねへ多「間が惡くつても斷つてくんねへ久「ア・〳〵鼻の先に霊下つて居る寶玉を取らねへのか。殘念だあァ仕方がねへ往つて斷つて來やうと。云ひながら久八ハ藤野屋へ參り久へイ參りました杢「今度ハ表から來たか久「先刻戴いたれ菓子ハ持て參ります杢「炭屋さんに話しをしましたか久「ヘイ話しましたか。どうも杢「迂濶返事をしますまいねへ。俺用達の娘と炭屋とハ釣合わない。釣合わぬハ不緣の元位の事ハ云ひましたらう杢「貴所立聞をしましたらう杢「なァヨ立聞きはしませんか。彼の人だから其位の事は云ひましたらう久「其通り云ひましたヨ。夫婦倶稼ぎをするのだから金ハ使へばなくなる。れ孃樣だからお飯ハ炊けず。味噌漉を提げて買物ヨも行けねへ。おひきずりでは身上の爲めヨならねへからお斷りすると云ひました杢「成程。至極尤もだが。何う云ふ人の娘あら嫁に貰ふだらう子久「計り炭屋で俺座いますから明樽買ひの娘でもあつたら貰ひませう杢「お飯を炊くのハ習わせなかつたが。絹布い物を着るのハ嫌いで。針仕事も覺へ。髮も自分で結ひますが。飯を炊く事ハ知りませんが。宜い久八さん。お前さんヨ娘を遣りませう。お前さんの家ヨ一年でも半年でも置て。お飯も炊かせ。德利を提けて買物ヨ往かれるやうヨして。多助さんの所へ嫁ヨやつてくたさいナ久「アノ私の娘に。眞實で俺座いますか杢「嘘ハ吐かない久「宜しい。ヨれで多助さんが貰はないと云へバ喧嘩をします。忘れないでお菓子を戴いて參ります。左樣ならと。又歸つて多助ヨ藤野屋のヤた事を話しますと。多助ハ首を傾けて。思はずハタと膝を叩きまして多「成程面白い。明樽買へ彼れ程の大家の娘を呉れて計り炭屋の嫁ヨ遣りたいと云ふなら貰つても宜しい。お前の娘なら貰はふが。私一存で定める事は出來ない。主人ヨ相談して主人が持てもい、と云へバ貰わふから暫く待てお呉んなせへ久「そんなら早く往て相談して來るがい、と。ヨれ

から多助が參りますので作坐いまそが。中〳〵兀よは歩行きません。炭荷を擔いで。計り炭は宜しう〳〵と商なひとして儲けながらまいります。山口屋の納屋の所へ荷を下しまして。店の方から入り多「番頭さん。作無沙汰をしました和「イヤ暫く來ないがどうしたへ。旦那樣も案じて入つしやる。色〻風聞も聞たが大分繁昌ださうで。誠よ結構だねへ多「エ、直ぐよ旦那樣よお目よ掛りお話しやてへ事があつて參りやした和「さうかい。臺所の方へお回りといひますから。多助は草鞋を脱で上ります。番頭へ多助の參りました事を主人に知せますと主人も大きよ喜んで主「誠よ能く來た私も逢ひたいと思つて居たが尋ねもしや。獨りで嘸ぞ忙かしからうと思つて案じて居た多「誠よ作無沙汰を致しました。貴めて一日置きよもお見舞よ出てへと思つて居りやしたか見世を出して。夜も商ひをしやすから。忙しくつてツイ作無沙汰をしました主「却て無沙汰の方か宜しい。誠よ能く來た。何か用かあつて。何か話したい事か

あるさうだがなんだへ。オイお前多助が來ましたヨ女房「能お出だねへ。此間労よ尋ねてやれと云たけれども寄りもしず。塩梅でも惡い時よは獨りものだから藥を煎じるものもあくつて困るだらうと思つて居たが。大層繁昌ださうで。蔭おがち喜んで居ますよ多「誠よそれもてれも皆旦那樣のお蔭で。誠よ繁昌して。此節は粉炭も無くありましたから旦那樣の炭を買て打毀して賣らうと思つて。さうして私もてれから稼いで金を貯めて國へ歸つて家を建てゝいと思つて居やす主「それは誠よ結構お事で多「就きまして私嫁を一人貰へと云て人が世話をしやすが一人口は食へねへが二人口ハ食へると云ふ譬へもありやすから。旦那樣がまァだ早いと云へバ持たずよ居やすし。居つてもいゝと云へバ貰はうと思つて。旦那樣よ相談に來やした主「世話をする人があれバ貰らうがいゝよ。媒妁口と云ふものは甘い事を云ふものだから能く先方を聞、紛して貰ふが宜しい。再縁でもする女か多「旦那斯う云ふ譯で作坐いま

妻お世代

角右衛門多助を賞して婚儀を祝せ
塩原角右衛門
塩原多助

すと。あれから明樽買のせ話で。親元へあれ〳〵とやして。明樽買の娘よして貰ばふと云ふ事を話しますと。山口屋善右衛門は案外の話しよ實に感心しまして主「多助。それと云ふのもお前の心掛けよある。神佛のお惠よあるからあれを貰へあいと云ふ譯へない。貰〳〵〳〵多「ハイ〳〵〳〵女房「誠よ思ひ掛ない話しじやあいか其親が遣らうと云ふのも感心だか。娘かお前よサ。お前だつて男へ惡るくへないか。擔ぎ商ひとするのと見拔いて來たいと云ふ。其子も感心ではありませんか。ねへ旦那主「誠よ結構だ。己が媒妁としませう多「それはいけません。藤の野屋から來るなら山口屋の旦那樣の媒妁が宜しいが。明樽買ひの岩田屋久八の娘よするのだから山口屋の旦那じやアいけません。少し過きますが番頭さんが家を持て夫婦一對揃つて居ると云ふから。和平さんよお賴みやませう主「宜しい。そんあら和平よ云ひ附けるが。婚禮は何日だへ多「先方へなんと云ふか知んねへが。十二月の十五日と定めました主「それへ如何

云ふ譯で多「日へ吉か惡いか知らねへが。私が國を出たのが八月十五日で。店を出したのも十五日だから。大切の日を忘れねへ爲め。十五日よしませう主「左樣サ。三日だから至極宜ろしからう。それだが隣家から直ぐ來るのは變だらうから。何處へか廻つて來るかへ多「なアよ直ぐよ來やす主「何處か高張でも出す所があるだらう多「婚禮はどうか晝の午の刻に願へてい主「それは可笑しい。お大名の婚禮なら午の刻だが。計り炭屋の婚禮よ晝へ可笑しい。夜がいゝよして下せへ。夜へ出來ねへ主「何故夜へ出來ない多「それでも夜すると商ひが出來ねへ主「商賣は一日位休んでもいゝじやアないか多「それは私アかまわねへが。方々の神さん達が待つて居るから。朝へ商賣よ出あけれバなんねへ。又夜へ家で商ひをするから。遠くから神さんが前掛けの下へ味噌漉と入れて買ひよ來るのよ。今日へ家が婚禮だからと云つて斷ると冗足をするべいじやねへ。炭があけれバ此寒いのよ木片を焚い

て。アウ〳〵云つてあたる位で。大勢の人に寒い思ひをさせあけれバあんねへから。朝商ひをして。夜商ひをしてゐれから寝せへすれバよゐんべい 主「そりやァ寝るのは宜が。成程人の難儀になるのだから其方が宜からう。それじやァ上下を着るかね 多「どうして〳〵 主「先方が藤野屋李左衛門だから。婿も上下位は着あくつちやァあるまい 多「なァよ私ァ此の筒、袖で宜うがんす 主「どうか身の出世だから袴羽織でやつて呉れと。あれから和平と呼んで話しますと。和平も大きよ喜んで承知しました 多「旦那様どうか鳥渡着物と羽織を貸しておくんなせへ 主「何處へ往くんだ 多「あれから往つて來る所があるから 主「どんな着物がい・ね 多「なァよ。鳥渡したので宜うがんす 主「これ悴のを貸してやれ。結城紬のが宜しいと。これを着まして。多助が戸田様の住屋舗へ參り。實父鹽原角右衛門よ會ひ。婚姻の事の相談を致しますと云ふお話しで住座いますが。一寸一息つきましてゆ上ませう

鹽原多助一代記第十八編

三遊亭圓朝演述
若林玵藏 筆記
酒井昇造 助筆

第十八回

親子重レ義志愈堅
夫婦守レ儉家益富

多助は主人山口屋善右衛門から着物と羽織を借り。之れを着まして戸田様の屋敷に居る實父鹽原角右衛門の所へ往きましたが。丁度十ヶ年ぶりて御座います。尤も五年前危難の節實父よい逢ひましたが。匆卒に別れまーたゆゑ。今日は染々物語りをーやうと思ひまして。屋敷へ參り 多「お頼み申ます〳〵 男「ドーレ 多「手前は山口屋善右衛門方の手代多助と申します。旦那様へ御目通りを願ひやす 男「左様か少々扣へて居れ 男「エ、山口屋善右衛門方の手代多助と申ものが參りまして。旦那様

へれ目通りを致したいと申ます角「ナニ多助が參つたと。如何云ふ姿で參つた。又筒袖を着て參つたか男「イヽエ羽織を着て參りまーした清「妾もあれぎり逢ひませんからどうか貴郎。れ義理堅いのも程がありますかられ逢ひ下さいまー角「多助とこれへ通せ男「ハイと云ひながら玄關へ參り男「此方へ通らつしやい多「ハイと云つて座敷へ通りましたが。母の顔は十年ぶり。父の顔も五年前よ見たが眞の闇で見たのですから能く分りません。多助は實よ懷かしく。胸が塞がつて多「御機嫌宜ーう。と云ふなりに。ピッタリ疊へ頭を摺付けて居ります角「誠に久敷逢ひません。人の噂に山口屋善右衛門方の奉公を勤め上げて。何か本所邊へ店を出して。大分繁昌の樣子も聞いて居つたが。何か用事があつて參つたとか。用向を申せ。互に無事で居て芽度多「私もれ目よ掛りてへと思つて居ても。奉公の中ハ只れ屋敷で御両親樣のれ達者で入つーやると云ふ事を影ながら聞きますばかり。私も望みが叶ひまして。山口屋を首尾能く十一年勤め上げ。相生町へ店を出し。繁昌ーて忙がしいので間合もなく。夫故れ屋敷へも出ませんでしたが。今日は御機嫌伺ひながら參りまーて清「誠よ旦那樣もれ年をとるー。最う尋ねて來さうなものだと思つて居ても。旦那樣はれ義理がれ堅いから沼田の養父に濟まんと仰ーやつてれ逢ひあさらなかつたが。今日は立派になつて來て誠に嬉しい事で多「私も嬉しう御座へます。就きまして國へ歸らうと思つて居まーたが山口屋よ預けた金が三百兩ばかりで。國に歸つて家を興てべいとは存まーたが。江戸で稼いでもう七八百両貯めてから歸るべいと思ひやーて。店出しをーやーた所が。有り難へ事よ繁昌ーます。私もまだ三十一だから今十年も稼げば國の家も大く興てべいと思つて居りやした所が。女房を世話をする人があつて。主人も得心で御座へますが。持ても宜ーいか。宜ーくねへか。伺ひに參りやーた角「誠よ手前が堅くーて居る所からそう云ふ譯にあるので。誠よ恐悦の事だ。何う云ふ者

の娘じや。山口屋善右衞門が得心で持たせると云ふ女房あら宜しい。それは結構だ清「最うこんなに立派よ成つて來ましても矢張幼稚心持ちで居りますが。女房を持つやうになつて誠よ結構だねへ。先方は何う云ふもので。女房の身分は多「身分はこれ〳〵と。前申上ました藤の屋の事から。明樽買の娘にして貰ふ事を細かに申すを聞て。角右衞門は學問のある人だけに暫く考へて角「多助誠に得難い幸ひだ。貰へ〳〵。向ふも藤野屋杢左衞門の娘。假令へ樽屋からよこしても婚禮の時は世間へ對して振袖位は着せてよこすだらうナ清「そりやア貴郎。假令へ炭屋でも婚禮の席は立派にしなければありませんから。嫁も池赤に縫ひ摸樣の振袖に白の掛位は着なければなりません。多助も世が世なら上下位は着なければありませんが。運惡くア、云ふ事にあつたから。どうか貴郎。御紋付きを遣て下さいまし角「さうサ。上下も入るなら遣るから持つて往くがいゝ多「主人から紋付きの着物と羽織と袴を祝つて呉れましたからいりません角「何を出せ。袴と盛影を出せと備前盛彫の一刀を出させまして角「これは手前の身の固めの祝ひとしてやる。又此五十金も遣す多「誠よ有り難い事で。れ身よ就きましたものを戴きますのは誠に有り難う御座いますが。れ腰の物は歳屋には入りませんから頂戴致しません角「左樣でない。町人でも脇差の一腰位はあければならんものだ。これは祖父樣からのれ讓りものだから取て置け多「へイそれでは戴きやすが。此五十兩は戴きません角「ダガ能く考へて見ろ沼田の鹽原角右衞門殿は同姓の交誼で。手前を藪の上から取上げて育で〻。八歳よ成て返へす時禮として五十金を贈られ。拙者は其五十金を持て身姿を整へ。江戸へ出て。只今斯うやつて三百五十石頂戴致すやうにあつたのは角右衞門殿の恩儀。其時申受けた金を只今返金よ及ぶのだから此金を以て沼田の家を興る足しよすれば己れの氣も濟むから。これは强て受取れ多「御尤もで御座いますから此金を以て養父の法事を致し。餘りで馬でも買

新婦炭を脊負て夫を助く

塩原多助

嫁お花

ひますやうにーませう角「婚禮は幾日だナ多「エ、來月十五日で御座います角「夕景から行て撲樣と見たいナ多「婚禮は正午の刻よ極めました角「ハテ子何う云ふ譯で多「これよは深い譯がありまず角「左樣か立派にやれ〳〵清「アヽ是は差ふるーた櫛笄。昔物ゆゑ氣には入るまいけれと嫁御へ私が心斗の祝物。常に此櫛と笄とさーて舅姑が側に居ると心得。由斷あく家を思ひ。夫を大切よ致やう。私が申たと云て。遣はしてれくれ多「ハヽ有難く戴きます。左樣あら御機嫌宜しう。と暇乞ひをーます。兩親が玄關まで送つて來まーて。嬉し泪をこぼしますを見て多「左樣あら時節があれば又れ目に掛ります。と云ひつヽ別れをつげ歸つて來まーて。早速久八を以て藤野屋へ挨拶を致ーますと。藤野屋のれ嬢樣はこれから十五日まで樽屋久八の家で御膳炊きの稽古を致ーて居まーたが。扨て十二月十五日とありますと。女親ハ妙あものでで。假令樽屋へ遣つても嫁に往く時の品とて拵へて置いた。縫摸樣の振袖は多助に話しをして當日だけは着せて遣りたいと云ふ。多助は袴羽織で。れ花は縫摸樣の振袖と。大和錦の帶を締め。髪は文金の高髷に。フサ〳〵と結ひまして。少し白粉も濃く粧けまして。和平失婦が三々九度の盞を手に取上る折から表の方から半合羽を着て。今河岸の船から上がつて來たと云ふ樣子で。入つて參りまーたのは炭の荷主で飛駒村の吉田八右衛門で御座います八「ハイ御免あさい。誠に不沙汰ーやーた和平どんも此方かね和「これはどうもれ珍らーい。當家も芽度事がありまして參つて居ます八「店出しをすると云ふ事を聞たから炭荷を送らあければ多助さんに嘘をついたやうだから。どうか送りてへと思つて居たが。中々〳〵千兩の炭が集まらねへのを漸々〳〵集めて。十三艘の船へ積んで河岸へ持て來たが。川が狹へから棧橋が邪魔よ成て仕樣がねへ多「ハァどうも有り難うがんす。私が家は今日婚禮でがんすから。くんあせへ八「婚禮所じやねへ。炭を揚げあくつちやァ他の舟の邪魔に

成つて仕様がねへ。炭を揚てから婚禮を仕あせへ。と云ふから。多助は紋付きの着物の片肌抜ぎで。臀を端折つて。向ふ鉢巻を致まーて精々と炭を擔ぎ始めました。さうすると嫁も花「私の振袖を結んで下さい和「何をするんだ花「何んでも宜しい。と云ふから結んでやりますと。子供が水惡戯をするやうな姿をして。れ花は兩裾を高くはーより。跣足で河岸へ出て往きまして花「旦那様。れ一人でれ忙がしう御座いませうから。妾も擔ぎませうから輕さうなのをくださいまし多「能く來た。擔いで呉れ花「ハイ。と云ふので。これから擔ぎますから久八。和平も手傳つて擔ぎましたから。忽ち家の見へあいやうよ炭を積み上げ。芽度婚禮を濟せて。八右衛門ハ媒妁と共に別れて歸ります。これから夜よなると夫婦で商ひをーますと。多助の家へ嫁が來てゐれ〳〵と云ふから嫁を見ながら方々から買よ來ます。これから商ひを仕舞。て愈々〳〵床盞と相あります多「芽度あア已ア斯うやつて眞の親父よ貰つた紋付きの着物を着て。れ前と話しをするだア花「ハイ〳〵。と恥かーそうな顔をして居ります多「誠よ不思議な譯で。己ア家へ嫁に來て。己ア醜男で誠にどこと云て取り所も何もねへが。己ア精神を見拔いて。れ前の親父樣も呉れたゞから。末長く成るべいが。夫婦は初見よあると云ふから。婚禮をする時に堅く約束をしあくつちやアならねへが。己ア やうな者でも亭主に持てば己ア辞を背かねへか花「ハイ決して背きませんが。不束ものでご御座いますから能く御用をれ云ひ付けあすつて下さいまー。漸く御膳は炊けるやうよありまーた多「さうだつてあア。れ前と七十八十までも夫婦に成だが。れ互へよ氣よ入らぬへ所が出來る。どうも嫁も彼所は宜が此所が氣に入らねへ。どうも腹ア立つていけねへと云へば。れ前も己ア旦那はどうも彼所はいゝが。腹ア立つていけねへとか何とか。思ふ事があるものだが。れ互へにいけねへと思ふと。一つ所よ居るのが厭やよあるから。いけねへ所は取て打捨つて仕舞て。宜所べいで夫婦にあつて居べいぜいゝか花「至極

御尤もで御座います多「さうサこれより尤な事はねへ。底でれ前は御用達ーの娘で。計り炭屋へ嫁よ來て。味噌漉しを提ると云ふ心は。此の多助が仇には思はねへ。已も死に身にあつて働き。れ前も働いて此身代を大かくして。人には云へねへが。時節次第で。少くも此本所半分は已れが地面よしべいと思ふのだ。さうはいくめへが。棒程願つて針程叶へだから。大くやるべいや花「ハイ〳〵多「それには儉約をーあくつちやァいけねへ。云臨にするのじやァねへ。儉約をするだヨ。吝嗇とは義理も情も知らねへで。奉公人抔に食ふ物も喰ハせず。着る物も衣せねへで。人を困らせても搆わず。妄闇に金を貯るのを吝嗇と云て極いけねへので。それから自分が一抔食ふ物と半分食て。彼れは欲しい買ひてへと思つても。堪忍ーてやれと云て。半分よして置く。それが儉約の本だ。それを天地に預けて置けば。利が附着て來る。其時は五枚でも十枚でも一時よ着られるやうになるから。十年が間稼があければあんねへ。今に小兒でも出來ると骨へ折るからしつかり遣て呉れ花「どのやうにも儉約を致ーます。御膳は一度位よしませう多「れ飯はどんと食てもいゝのだ。底で儉約がいゝと云ても明日が日死あねへものでもねへ。其時此家へ來て芝居見物一ッ。花「觀一ッ。しねへと思ふと。愚痴が出て死ねねへものだから。已が一遍は見せる。花「觀でも。芝居でも。煙火でも。何でも。一遍は見せる。美服も一遍ハ着せるが。二度とはいけねへ。一遍着るだヨ。それを獣目だと云ふあら今の中歸る方が宜。早い方がいゝヨ。それが氣よ入らあければれ前は縹致があつて何處へでも往ける立派あれ嬢樣だから。立派あ所へ嫁よ往くがいゝ花「妾ハ立派あ所へ往きたければ此方へ參りはーなせんからどうかれ見捨。あさらあいでれ置き下さいまし多「見捨ると云ふ事はねへが。まァだ氣に入らねへ事がある。れ前の着物は皆ああんあよ袖が長いか。彼の袖があれば小兒の着物が一つ出來る。冗じやァねへか花「振袖物は皆あ彼あに長う御座います多「彼の袖だけ冗だから彼れを鉈で

たすけすけ
多助良
えん
縁を得て
いつけさか
一家栄ふ
塩原多助
岩田屋久八
和平妻

番頭和平
嫁お花

打切つて仕舞ふから此處へ持つて來う花「ハイ〳〵。と少しも逆らはず。嫌な顔もしず。松竹梅の縫摸樣の振袖を持て來ますと多「これを打切るだァヨ。已ァ家じやァ入らねへから花「ア、申ー旦那樣。貴郎は晝かられ働きでれ草臥れで御座いませうから。妾が致します。と云ひながら振袖を薪割臺の上へ乘せて。惜氣もなく。ザクウリッと二つ三つよ。切りまーた時は。多助も思はず手を拍て多「能く切つた。それでこそ鹽原の女房だ。多助の家は此振袖の袂よある。と云て大きよ喜んで。實よ玉椿の八千代までと新枕をかはせ。夫から。夫婦共稼ぎを致しまーて少しも油斷をしませんから。忽ち身代を仕出ーまーたに付。多助は豫ての心願通り沼田の家を立派よ再興致ー。分家の家も興まして。今日まで鹽原の家は連綿と致して居ります。又多助は江戸表よ置きまーても稼業よ出精ーまして。遂よ巨萬ナ身代とおり。追々〳〵よ地所を買入れ。廿四ケ所の地面持とまであり。本所よ過たるものが二つあり。津輕大名。炭屋鹽原と世よ謠はる

〻程の分限に數へられ。其家益々〳〵富み榮えまーたが。只正直と勉强の二つが資本でありますから。皆樣能く此話を味わへて。只一通りの人情話と御聞、取りなされぬ樣に願ひます。此話も餘り長くなりましたから未だ纏りのつかぬ道伴の小平と盲人のれ龜母子の事などは鹽原多助後日譚とーて。尙ほ追々〳〵れ聞きに達しますとと致ーまーて。一先づ此所で打切りよ致します。長らくの間御愛顧に相成りまーた段は深く御禮を申上ます

鹽原多助一代記第十八編　大尾

明治十八年一月廿七日版權免許
明治十九年七月五日版權讓請御届

筆記者　埼玉縣平民　若林玗藏
東京下谷御徒町一丁目六十三番地住

出版兼發兌人　東京府平民　武部瀧三郎
京橋區常盤町貳番地

三遊亭圓朝述　若林玗藏筆記
西洋人情話　英國孝子ジョージ。スミスの傳　繪入美本　全八冊　大尾　一部定價九錢　全八冊前金五十六錢

世に泰西の小説を翻譯せしもの其數少なからざれども彼是風俗を異とするを以て讀者をして十分の快樂を覺へしむる事能わず然るに此書は英國に有名なる孝子の艱難辛苦の情を著述したる小説を三遊亭が我國の事實に引直し常ゑ寄席に於て聽衆の喝采を博したる西洋人情話しなるを我が速記法を以て話しの寫眞となしたるものなれば婦女子と雖ども讀み能く解し能く一讀して快を呼ぶべき稀世の珍書なり看客幸ひゑ鹽原ゑ亞て御愛讀の程希望致します

群馬県立図書館
0295194-5
馬県立
書館